

## 総 例 言

- 1 本書は、長野県佐久埋蔵文化財調査センターの昭和61・62年度事業、岩村田遺跡群菅田遺跡第3次、岩村田遺跡群新町遺跡第3次、宮の上遺跡群宮の上遺跡、栗毛坂遺跡群中曽根遺跡の発掘調査及び藤塚遺跡の試掘調査報告書の合冊本である。
- 2 調査委託者 菅田・新町・宮の上遺跡 長野県佐久建設事務所  
中曽根遺跡 株式会社 堀内組  
藤塚遺跡 浅科村
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 調査所在地 菅田遺跡 佐久市大字岩村田字今宿  
新町遺跡 佐久市大字岩村田字新町・住吉・行人塚  
宮の上遺跡 佐久市大字横和字宮の上  
中曽根遺跡 佐久市大字岩村田字中曽根  
藤塚遺跡 佐久市大字塚原字藤塚
- 5 編集分担は下記の通りである。また、原稿執筆分担については各遺跡の例言に明記してある。  
菅田・新町・宮の上遺跡 小山岳夫、中曽根・藤塚遺跡 高村博文
- 6 本書及び菅田・新町・宮の上・中曽根・藤塚遺跡出土遺物、図面等すべての資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、岩村田・横和・塚原の各地区地元の方々には発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所、宇賀神誠司、白田武正、岡村秀雄、河西克造、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、笹沢 浩、島田恵子、堤 隆、寺嶋俊郎、花岡 弘、福島邦男、丸山敏一郎、百瀬忠幸、森泉かよ子、由井茂也

(敬称略五十音順)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第10集

岩村田遺跡群

SU GE TA  
菅 田 III

長野県佐久市岩村田菅田遺跡第3次発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

## 例 言

1 本書は、長野県佐久建設事務所による都市計画街路事業西本町瓦宿線建設工事事業に伴う、岩村田遺跡群菅田遺跡の第3次発掘調査報告書である。

2 調査委託者 長野県佐久建設事務所

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査対象地番および面積 岩村田遺跡群菅田遺跡（IIS）

佐久市大字岩村田字今宿 540、541—2、546

195㎡

5 調査期間 昭和62年3月12日～3月20日（発掘調査）

昭和62年3月23日～3月31日（整理調査）

6 調査団の構成

事務局 佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳

庶務係主任 畠山 俊彦

庶 務 係 高橋 純子（臨時職員）

調査団 団 長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者 林 幸彦、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者 小山 岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調 査 員 篠原 浩江（佐久考古学会員）

調査補助員 神部 妙子

協 力 者 黒沢文子、中島文子、中藤繁子、油井幸子（発掘調査）

小林幸子、平林美津江、宮川百合子、和久井義雄（整理調査）

地形・地質指導 白倉 盛男（佐久考古学会副会長）

7 本書の原稿執筆、編集は小山が行った。

8 本書で使用した写真は小山が撮影した。

9 本調査に関するすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、佐久市役所浅間支所にご協力・ご援助をいただきました。記してお礼申し上げます。

また、報告書作成にあたり、下記の各氏より多大なご指導、ご助言をいただきました。

白田武正、島田恵子、堤 隆、花岡 弘、福島邦男、由井茂也（敬称略五十音順）

# 目 次

## 例 言

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至る動機	1
第 2 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の立地と環境	3
第 III 章 第 I～IV地区の概要及び基本層序	6
第 1 節 第 I 地区	9
第 2 節 第 II 地区	10
第 3 節 第 III 地区	10
第 4 節 第 IV 地区	11
第 IV 章 調査のまとめ	11

# 挿 図 目 次

第 1 図 菅田遺跡位置図	1	第 5 図 第 I 地区の層序	9
第 2 図 周辺遺跡分布図	3	第 6 図 第 II 地区の層序	10
第 3 図 菅田遺跡の発掘区	6	第 7 図 第 III 地区の層序	10
第 4 図 菅田遺跡の発掘区	7	第 8 図 第 IV 地区の層序	11

# 写真図版目次

図版 一	1 菅田遺跡近景	図版 三	1 菅田遺跡第 III 地区
	2 菅田遺跡調査地区近景		2 菅田遺跡第 IV 地区
図版 二	1 菅田遺跡第 I 地区および層序	図版 四	1・2 表土除去作業
	2 菅田遺跡第 II 地区層序		3～5 スナップ



## 第2節 調査日誌

3月12日(木)

佐久建設事務所、市教委、佐久埋文センターの3者で協議を行い、範囲確認を行う。  
器材を搬入する。

3月16日(月)

表土除去作業を重機にて開始する。生活道路の確保・ガス・水道管等の保全のため、調査地区を東側より、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区に区分して調査を行う。いずれの地区にも表土下に黒色土が厚く地積しており、ローム層まではかなり深く掘り下げなければならない。地元の人の話では、本調査区は昔は足軽屋敷近くの池であったという。また、黒色土上、あるいは黒色土中には、砂層の地積がみられ、数次にわたって砂が流出していたことも確認された。

黒色土中からの出土遺物は中世と考えられる内耳土器片などがみられた。

3月17日(火)

第Ⅰ地区、第Ⅲ地区の黒色土掘り込みを作業員を導入して行う。湧水が激しいため、作業は困難を極める。

3月18日(水)

前日の作業を継続するが、手作業では深掘りが不可能なため、再び重機で作業を行う。土層分割作業も行う。

3月19日(木)

表土除去、地層確認トレンチ掘り下げ作業を重機にて行う。手作業を併行して行い、湧水が激しいため、ポンプを導入する。黒色土上より、部分的にローム層の検出をはかったが、ローム層が検出できたのは、東側の微高地へ連なると考えられるローム層レベルが高くなった第Ⅰ地区のみで、他の地区はかなり深い。あまり深く掘ると危険な状況に陥るため、ローム層検出は第Ⅰ地区のみで断念する。図面作成作業は第Ⅰ～Ⅲ地区のセクション図を完成する。

3月20日(金)

第Ⅳ地区のセクション図を作成する。層序説明の記入を行う。全体図を作成、その場で修正も行う。器材を搬出し、調査を終了する。

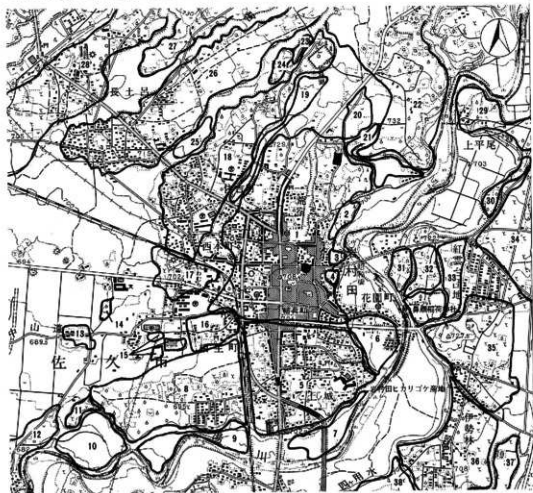
3月23日(月)～3月31日(火)

図面修正、遺物実測、トレス、原稿執筆等、報告書作成作業を行ない、岩村田遺跡群菅田遺跡の全調査を完了する。

## 第II章 遺跡の立地と環境

佐久平は南北に流下する千曲川によって盆地の平坦部をほぼ2分され、川西の左岸地域にあたる野沢・中込地区、川東の右岸地域にあたる岩村田・平根・東地区で遺跡の立地条件も大きく異なる。川東の右岸地域は、基盤に浅間・黒斑火山の水蒸気爆発による塚原泥流が分布する地帯であり、更に追分第一灰流（P1）と呼称される浮石火山灰層が厚く地積し、本地域の基本的な地盤を形成している。一方、川西の左岸地域は、浅間火山の軽石・火砕の噴出により堆積物がみられず、凝灰岩・砂質凝灰岩・細粒砂岩・礫質凝灰岩が薄層の互層を繰り返す相浜層を基盤として、表土もこれが風化分解した強粘土を基本に形成されている。

岩村田遺跡群菅田遺跡は浅間火山の噴出物を地盤とする千曲川右岸地域に立地する。この地域



第2図 周辺遺跡分布図（1：25,000 国土地理院地形図による）

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	区分No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
					縄	古	中	平	中	
1	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後、新町、菅田、古城池	2段丘	○	○	○	○	○	
	52-1	六供後遺跡	岩村田字六供後	2段丘	○				○	S55年度発掘調査
1	52-2	新町遺跡	岩村田字新町	2段丘	○	○				S59・60年度発掘調査
1	52-3	菅田遺跡	岩村田字菅田	2段丘					○	本調査
2	51-2	石壁城跡	岩村田字石壁池	2段丘	○	○	○	○	○	S54年度一部発掘調査
3	51-1	土城跡	岩村田字古城	2段丘	○	○	○	○	○	
4	51-3	大井城跡	岩村田字古城	2段丘	○	○	○	○	○	S55・58・60年度一部発掘調査
5	117	上の坂遺跡群	岩村田字舟通・上の坂・西八日町他	2段丘	○	○	○	○	○	S48・54・58年度一部発掘調査
6	118	下藤崎石遺跡	岩村田字下藤崎石池	1段丘					○	
7	124	岩井堂遺跡	岩村田字岩井堂	1段丘	○	○	○	○		
8	105	一本柳遺跡群	岩村田字東一本柳・北一本柳他	2段丘	○	○	○	○	○	S43・47年度発掘調査
9	100	中嶋車遺跡群	岩村田字中嶋車	1段丘	○	○	○	○		
10	99	中西の久保遺跡群	岩村田字中西の久保・東西の久保	1段丘	○	○	○	○		
11	98	北西の久保遺跡	岩村田字北西の久保	2段丘	○	○	○	○	○	S44・45・57・60年度発掘調査
12	96	嶋原遺跡群	岩・井字嶋原	1段丘	○	○	○	○		
13	191	上砂田遺跡	岩村田字上砂田池	台地	○	○	○	○		
14	192	松の八遺跡	岩村田字松の八	台地	○	○	○	○		
15	103	宮の西遺跡	岩村田字宮の西	台地	○	○	○	○	○	S58年度一部発掘調査
16	104	宮の北遺跡	岩村田字宮の北	台地	○	○	○	○	○	
17	59	門正跡遺跡群	岩村田字門正跡・黒石・清水田池	台地	○	○	○	○	○	S53・59年度一部発掘調査
18	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字琵琶坂・上直路池	台地	○	○	○	○		S60年度2箇所発掘調査
19	42	中久保遺跡	岩村田字中久保田・下久保池	低地	○	○	○	○		
20	43	西赤坂遺跡	岩村田字西赤坂池	台地	○	○	○	○		
21	44	上知子遺跡	岩村田字上知子池	低地					○	
22	16	黒毛田遺跡群	岩村田字黒田・鶴尾池他、小田井字前藤池他	2・3段丘	○	○	○	○	○	S59・60・61年度一部発掘調査
23	541	曾根新成跡	岩村田字下穴	低地					○	
24	45	新成遺跡	岩村田字新成	低地	○	○	○	○		
25	28	下藤沢遺跡	長土呂字下藤沢、中藤澤	低地	○	○	○	○		
26	9	長土呂遺跡群	長土呂字下藤沢他	台地	○	○	○	○	○	
27	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上市原他	台地	○	○	○	○	○	S54・55・57年度一部発掘調査
28	7	黒跡遺跡群	長土呂字黒跡池、菅宮池	台地	○	○	○	○	○	S54・55・58年度一部発掘調査
29	53	横石遺跡	上平尾字横石池	2段丘	○	○	○	○	○	
30	46	原池遺跡	下平尾字原池・山内	2段丘	○	○	○	○		
31	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	2段丘	○	○	○	○	○	S50年度発掘調査
32	49	上小平遺跡	岩村田字上小平	3段丘					○	
33	48	横池遺跡	安原字横池	3段丘						
34	47	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保、下平尾字穴岡池	3段丘	○	○	○	○	○	S61年度発掘調査
35	119	安原字遺跡群	安原字紀原・西大久保	3段丘					○	
36	121	東内池遺跡	岩村田字東内池	台地						S60年度一部発掘調査
37	120	紀原字遺跡群	新子田字紀原・内池	3段丘						S54・58・59年度一部発掘調査

は、浅間山火口を基点とする水流によって平野部まで放射状に発達した佐久平特有の「田切り」と呼ばれる谷地形が幾筋も形成され、これらに挟まれて細長く南北に伸びる数条の台地上に弥生～平安時代を中心とした周防畑（28）、長土呂（26）、枇杷坂（18）、岩村田（1）、上の城（5）、一本柳（8）など著名な大集落遺跡群が展開されている。岩村田遺跡群はその中でも中心部に位置する。東側直下には大田切りの一つとも考えられる千曲川の支流湯川が南流し、深い侵蝕によ



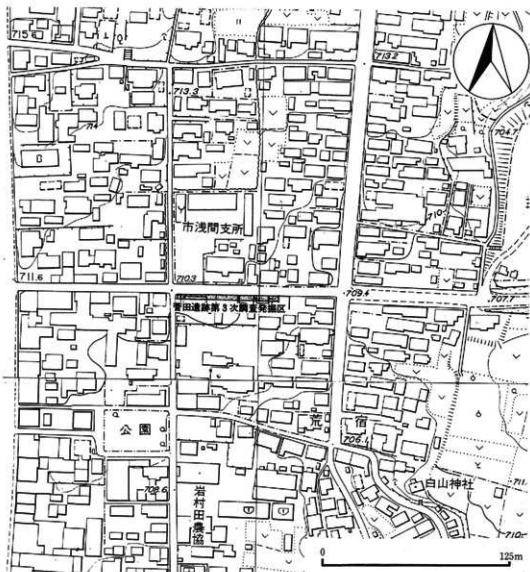
て比高差の大きな断崖が形成されて自然の要害となり、中世においては台地縁辺に大井宗家とその一族が築った大井城跡（2・3・4）が築造されている。今回、発掘調査が行われた菅田遺跡は大井城跡の西側に近接する。過去2度（昭和59・60年度）の調査結果を総合すると、菅田遺跡所在地点は有機質の黒色土が一樣に厚く堆積しており、低湿地帯が広く展開されていることが予想される。この地点の北側直上部には岩村田遺跡群の北半分を東西に二分する小田切りが縦走することを勘案すると、現状ではほぼ平坦な地形をなしている菅田遺跡は、旧状では北側の田切りから継続する谷地形の低湿地遺跡と考えられる。更に推し量れば、この田切りは菅田遺跡の南側にまで更に長く伸びていることが十分予想され、現状では一つの遺跡群として認識されている岩村田遺跡群は、実は東西に二分されている可能性も非常に強いのである。現況では全くわからなかったこの低湿地遺跡の存在は大井城跡の範囲や、大井城西側における防御施設を考える上で極めて重要な示唆を与えてくれるものと言える。

#### 参考文献

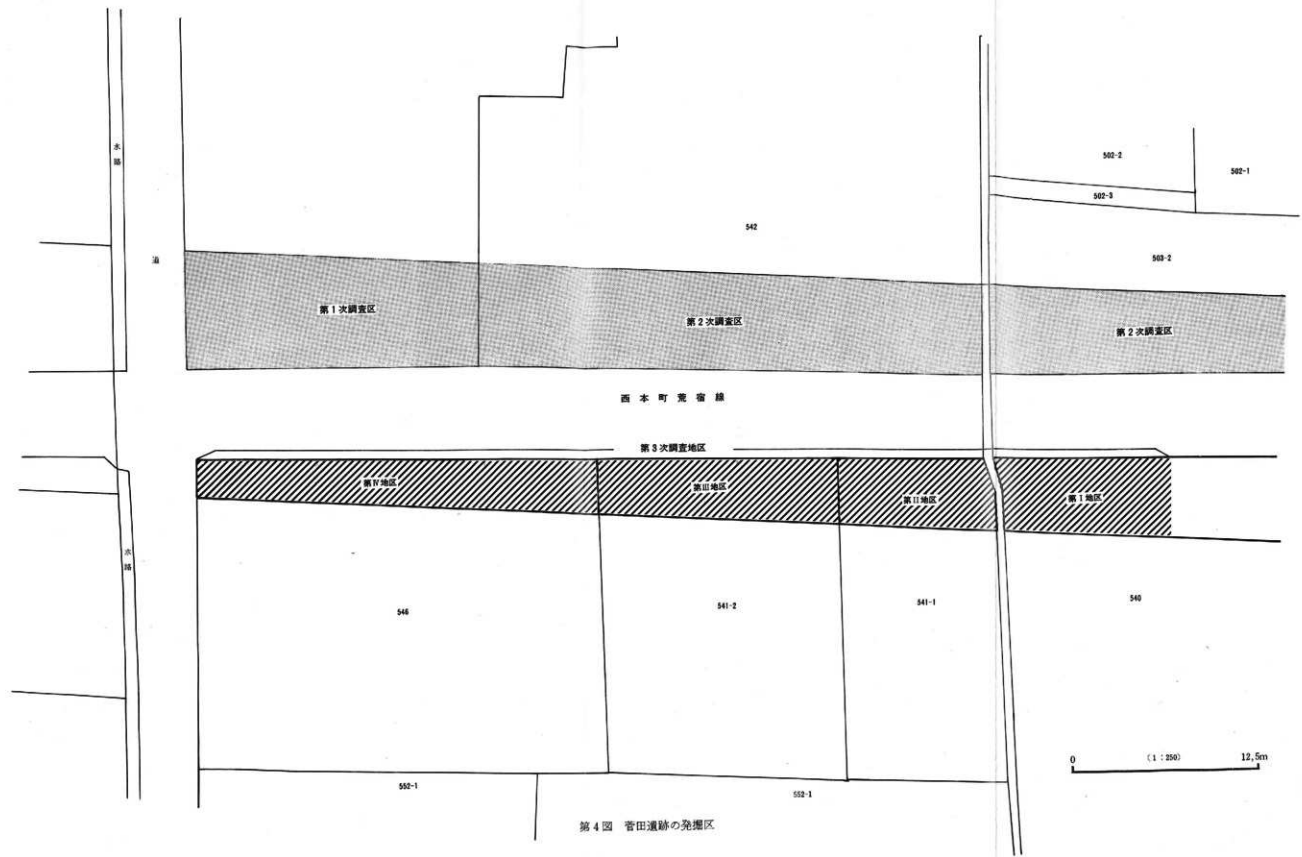
- 白倉 盛男 1986 「栗毛坂遺跡群付近の自然環境（地形と地質）」【栗毛遺跡群芝間遺跡】
- 白倉 盛男 1986 「西裏遺跡群付近の自然環境（地形と地質）」  
【西裏遺跡群西裏・竹田峯遺跡】
- 白倉 盛男 1986 「大井城跡（黒岩城跡）の自然環境（主として地形・地質）」  
【大井城跡（黒岩城跡）】
- 白倉 盛男 1986 「1 琵琶坂遺跡付近の自然環境（地形地質）」【琵琶坂遺跡】

### 第III章 第I～IV地区の概要及び基本層序

今回の調査地区は先述したように住宅密集地区に近接するため、ガス・水道等の配管を避けること、また、生活道路を確保することが義務づけられた。このため、調査対象地区全域にわたっての調査は不可能となり、第4図に示すように4地区に区別して調査を行った。以下に各地区ごとにその概要及び基本層序を記載する。



第3図 菅田遺跡の発掘区 (1:2,500 佐久市基本図による)



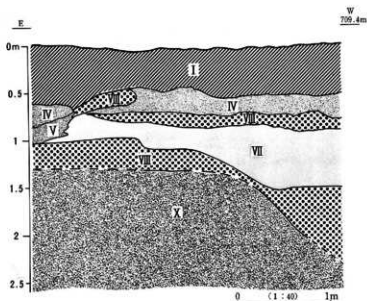
第4図 菅田遺跡の発掘区

## 第1節 第I地区 (第5図)

第I地区は今回の調査区の東端にあたる。50~60cmの厚さで堆積する表土(第I層)下には砂層(第IV・V層)の数次にわたる流れ込みが顕著で黒色土と互層をなしている。地山ローム層は調査地区の約北半部までは地表から約130cmの平坦面を保っているが、南半分に至ると急激にレベルが低下し、黒色土(第VIII層)の堆積も非常に厚くなる。

以上のような所見から、

本調査地区は低湿地帯が形成され始める最も東端部にあたる部分と考えて大過ない。このローム層は東側に至ると更にレベルが上がり、大井城跡の地盤をなすものと考えられる。尚、遺物は本調査区からは出土しなかった。



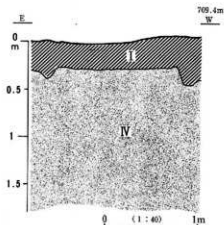
第5図 第I地区の層序

### 菅田遺跡の層序説明 (第I~IV区共通)

- |        |                |                          |         |
|--------|----------------|--------------------------|---------|
| 第I層    | 10YR4/1 褐灰色土   | 径30cm以上の大型の礫が多量に混入する。    | } 表土    |
| 第II層   | 10YR4/1 褐灰色土   | 礫や現代の瓦などが多量に混入し、粘性なし。    |         |
| 第III層  | 10YR5/4にぶい黄褐色土 | 細かい砂粒がまじり、粘性は弱い。         |         |
| 第IV層   | 7.5YR8/8 黄橙色土  | きめが粗くもろい。                | } 砂層    |
| 第V層    | 10YR8/2 灰白色土   | きめが非常に細かく、粘性は強い。         |         |
| 第VI層   | 10YR6/2 灰黄色土   | V層よりきめが粗く、粘性は弱い。         |         |
| 第VII層  | 7.5YR8/3 浅黄橙色土 | IV層よりきめ細かいが、黒色土がまじる。     | } 有機質土層 |
| 第VIII層 | 7.5YR2/1 黒色土   | きめ細かく、粘性は非常に強い。          |         |
| 第IX層   | 10YR6/2 灰黄褐色土  | 赤色粒子を多量に含み、VII層よりも粘性が弱い。 |         |
| 第X層    | 7.5YR2/8 橙褐色土  | 地山のローム層                  |         |

## 第2節 第II地区 (第6図)

本調査区は、第I地区の西側に近接する。東西方向にトレンチ確認を行った結果、第6図のような層序が確認されたが、表土(第I層)下の砂層(第IV層)の堆積は極めて厚く、地表から約180cm下まで掘り下げても、終息していない。更に深く掘り下げたわけであるが、セクション壁が湧水によって崩落してしまったため、地表下180cm以上の層序確認はできなかった。以上、本地区も低湿地の中にあると考えられる。

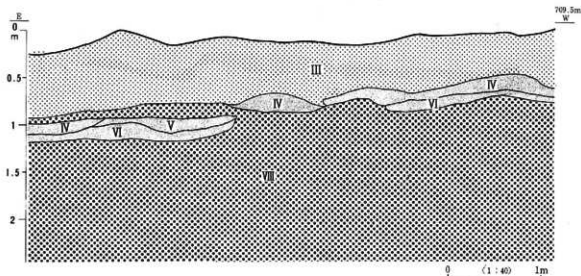


第6図 第II地区の層序

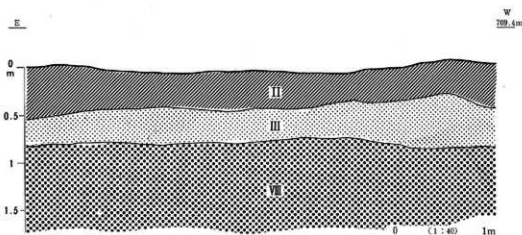
尚、遺物には表採資料ではあるが、平安時代の所産と考えられる土師器高台付杯(内面には黒色処理が認められる)、中世の所産の考えられる内耳土器の口縁部などの細片がある。

## 第3節 第III地区 (第7図)

本調査区も第I・II地区と同様に東西方向にトレンチを入れ、層序確認を行った。表土(第III層)はI・II地区とは異なり、礫をあまり含まず、砂粒がまじる土を基本としている。また、表土下はI・II地区のように砂層の厚い流入がみられず、直下の黒色土(第VIII層)上に薄い堆積



第7図 第III地区の層序



第8図 第IV地区の層序

が認められるのみである。黒色土(第VII層)の堆積は極めて厚く、地表から約2.5mの深さまでは確認したが、それ以下は、湧水が激しく、また、セクション壁が崩壊する状況に至ったため、やむをえず掘り下げを中止することになったため、未確認である。本地区も低湿地の中にあると考えられる。遺物は検出されなかった。

#### 第4節 第IV地区(第8図)

本調査地区は今回の調査区では西端にあたる。やはり、東西方向にトレンチを設定し層序確認を行った。表土にはII・III層があり、その下は黒色土(第VII層)が厚く堆積し、他の地区のように砂層の流入はみられない。また、この地区も他と同様、湧水が激しいため、地表下約1.7mまで掘り下げを中止した。従って、黒色土の底面は未確認であるが、本地区も低湿地であることは間違いない。遺物は行火と考えられる瓦器や、近代・現代と考えられる陶磁器の破片が出土した。

### 第IV章 調査のまとめ

今回の調査は長さ65mの道幅調査であったため、広い視野での考察はできないが、第1・2次の調査結果もふまえて菅田遺跡の性格を考えてみたい。調査で得られた所見は第3次調査の第I~IV地区がいずれも低湿地帯であるということ、また、第1・2次調査地区も同様に低湿地帯であることで、菅田遺跡がほぼ全面にわたって、低湿地に立地する遺跡であることがわかる。この低湿地が原始・古代の生活にどのような機能を果していたのか、また、中世において築造された



1. 晋田通路近景 (北東より)



2. 晋田通跡調査地区近景 (東方より)



1. 菅田遺跡第Ⅰ地区および順序



2. 菅田遺跡第Ⅱ地区層序





1. 菅田遺跡第Ⅲ地区 (西方より)



2. 菅田遺跡第Ⅳ地区 (西方より)



1. 表土除去作業開始 (第I地区)



2. 表土除去作業 (第II地区)



3. スナップ



4. スナップ



5. スナップ

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市

岩村田遺跡群 菅田遺跡Ⅲ

1987年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第10集

岩村田遺跡群

SHIN

MACHI

新

町

Ⅲ

長野県佐久市岩村田新町遺跡第3次発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

# 例 言

1 本書は、長野県佐久建設事務所による都市計画街路事業御代田佐久線改良工事に伴う、岩村田遺跡群新町遺跡の第3次発掘調査報告書である。

2 調査委託者 長野県佐久建設事務所

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査対象地番 岩村田遺跡群新町遺跡（IIM）

佐久市大字岩村田字新町878-2、住吉845-1、846-1、848、851-1・3、853-2、  
856-1、859-1、862、873-2、876、879、880、885、  
池畑356-1、356-4、356-10、行人塚371-3

5 調査期間 昭和62年9月1日（火）～昭和62年9月4日（木）（発掘調査）

及び面積 昭和62年9月5日（金）～昭和63年2月29日（月）（整理調査） 720㎡

6 調査団の構成

事務局 佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳

庶務係主査 轟山 俊彦

庶 務 係 田中 芳美（臨時職員）

調査団

団 長 黒岩忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者 林 幸彦、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者 小山岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調査 主任 羽毛田伸博（佐久考古学会員）

高村博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査主任）

調 査 員 篠原浩江（佐久考古学会員）

調査補助員 神部妙子

協 力 者 和久井義雄（佐久考古学会員）、小林幸子、平林美津江、宮川百合子、

7 本書の原稿執筆、写真撮影、編集は小山岳夫が行った。尚、遺跡の環境については昭和61年度刊行の第1次調査報告書で詳述されているため、本書では省略した。

8 本調査に関する資料はすべて佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において小林保一氏他、地元の方々から数々のご協力を頂き、また、報告書作成にあたっては下記の各氏より多大なご指導、ご助言をいただきました。記してお礼申し上げます。

白田武正、島田恵子、堤 隆、花岡 弘、福島邦男、森泉かよ子、由井茂也

(敬称略五十音順)

## 目 次

例 言

凡 例

### 第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機…………… 1

第2節 調査日誌…………… 2

### 第II章 基本層序…………… 2

### 第III章 調査の成果…………… 3

## 挿 図 目 次

第1図 新町遺跡の位置…………… 1

第2図 基本層序模式図…………… 2

第3図 新町遺跡の出土遺物…………… 3

第4図 新町遺跡の発掘区…………… 4

第5図 新町遺跡第3次調査トレンチ

設定図…………… 5

## 写 真 図 版 目 次

図版一 1 新町遺跡発掘区近景

2 新町遺跡発掘区近景

3 第1区トレンチ

4 第2区トレンチ

5 第3区トレンチ

6 第3区作業スナップ

7 第4区トレンチ

8 第5区トレンチ

図版二 1 第7区トレンチ

2 第7区作業スナップ

3 第8区トレンチ

4 第9区トレンチ

5 第10区トレンチ

6 第11・12区トレンチ

7 第13区トレンチ

8 第14区トレンチ

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

新町遺跡は、佐久市北部にみられる特異な「田切り」地形が微高地に変化する岩村田遺跡群の北西端に位置している。岩村田遺跡群は、佐久市遺跡詳細分布調査、数箇所発掘調査によって弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世にかけての大複合遺跡群であることが知られている。

昭和60年度岩村田地籍都市計画街路事業・御代田佐久線改良工事事業が本遺跡内で計画され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に発掘調査し、記録保存する必要性が生じた。このため、昭和60年度・61年度には2回にわたり、佐久建設事務所より委託を受けた佐久市教育委員会（S60）、佐久埋蔵文化財調査センター（S61）によって第1次、第2次の発掘調査が既に行われており、弥生・古墳時代の遺物、中世以前の遺構・遺物、近世の遺物などが検出され、多大な成果をあげている。本年の調査は前年度に引き続く第3次調査にあたり、昭和61年度発掘調査地区の道路を挟んだ東側の地点を佐久市教育委員会より委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行うこととなった。



第 1 図 新町遺跡位置図（1：50,000 国土地理院地形図による）

## 第2節 調査日誌

- 8月31日(四) 重機を搬入する。ガス・水道管設置場所の確認およびテント設置場所の確保等を行なう。器材搬入、テント設置も行う。
- 9月1日(火) 生活道路の確保、水道管保全のため調査地区の東側南部A地区を7箇所(第1～7区) 東側北部B地区を6箇所(第8～13区)に分断して調査を開始する。また、西側地区はC地区(第14区)とする。
- 9月3日(水) A・B・C地区の表土を重機によって除去し、遺構・遺物の検出に務めたが、表採遺物を除き、落ち込みがほとんど確認されなかったため、全体図および層序図を作成、写真撮影を行って調査を終了する。
- 9月4日(木) 器材・テントの撤収を行う。重機によって埋め戻しを行い、後に重機を撤収する。
- 9月5日(金)～昭和63年2月29日(四) 報告書作成作業を行い全調査を完了する。

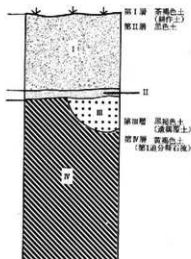
## 第II章 基本層序

### 第1節 基本層序

新町遺跡の第3次本年度調査地区はB地区北端から、A地区南端までの比高差、現況地形で約5.1mをはかり、比較的急な傾斜面を形成している。

基本的な地層は第1・2次調査地点とほぼ同様で第IV層第1追分軽石流(P1)を基盤とし、その上に黑色土(第II層)が薄く、更に上に耕作土(第I層)が30cm内外の厚さで堆積している。この層序は調査区のはほぼ全域にわたって共通するが、C地区においては黑色土が約1m以上堆積することが確認されており、現在はほぼ平坦に見える地形も、旧状では幾筋かの谷状の凹地形が発達していることが想像される。

今回は遺構が検出されなかったが、遺構確認面は第IV層第1追分軽石流(P1)上であると推察される。



第2図 新町遺跡基本層序模式図



### 第三章 調査の成果

今回の第3次調査は、第1・2次調査の調査地区と県道御代田佐久線を隔てた東側を主に行った。用地買収等の都合上、第3次調査の発掘区も大きく5箇所に分かれているため、便宜的に南からA・B・C・D・E地区と命名し、A～C地区は本調査、C・E地区は立ち合い調査を実施した。以上各地区毎に調査概要を記しておきたい。

**A地区** 全長約110m、幅3m内外の調査地区である。生活道路の確保、ガス・水道管保全のため、調査できない箇所が多数あり、第5図のように第1～7区に分断する調査を余儀なくされた。1～7区いずれからも遺構は検出されず、地表下30cm内外で黄褐色ローム層（第IV層）に達する。表採遺物ではあるが第4区から「焙烙」の破片が採集された。口径は推定できないが器高が6.0cm未満の低いもので、近世に位置づけられる可能性が強い形態を具備している。

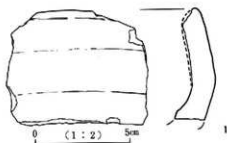
**B地区** 全長約78m、幅2～3mの調査地区である。A地区と同様8～13区に分けて調査を行った。遺構・遺物は検出されず、9区を除いて地表下30cm内外で黄褐色ローム層に達することが認められた。9区は地形が急激に落ち込み、黒色土、砂が2m程厚く堆積し、湧水も激しい。上層観察から自然に形成された地形と判断したい。

**C地区** B地区と道路を挟んで西側に対面する調査地区で全長11.5m幅4.5m内外を測る。遺構・遺物は検出されなかったが、B地区9区と同様に黒色土、砂が厚く堆積する地区である。南東方向にあるB地区9区とは近接した位置にあり、C地区からB地区9区にかけて谷状の凹地形が発達していた可能性は極めて強いと言える。

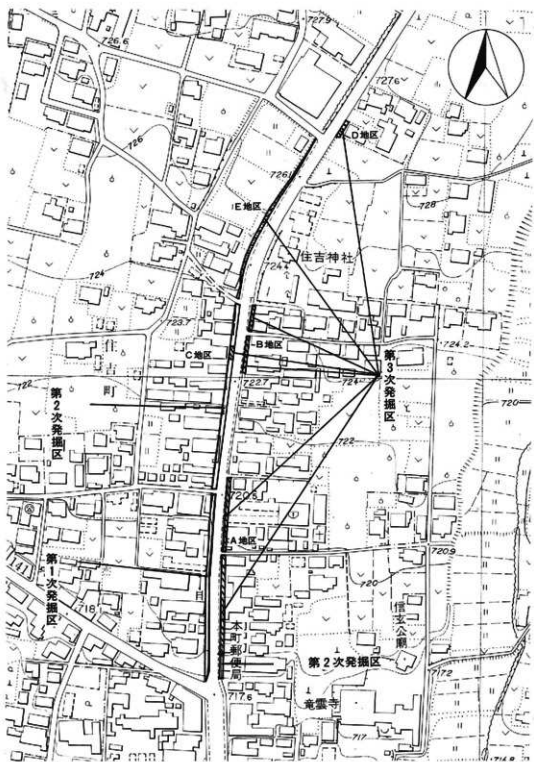
**D・E地区** 第3次調査の最北部にあたる調査地区であるが、調査できる幅があまりにも狭小であるため、立ち合い調査を実施したが、遺構・遺物は認められなかった。

まとめ 今回の調査では遺構は検出されなかった。遺物も焙烙の破片が1点表採されたのみである。しかし、一つの遺物が語るものの意義は極めて大きい。何故なら、1・2次調査で確認された近世における当地の生活の跡が今回の調査地区まで及んでいることが実証されたからである。また、現状では平坦化している地形が旧状では谷状の凹地形が入り込んでいた。

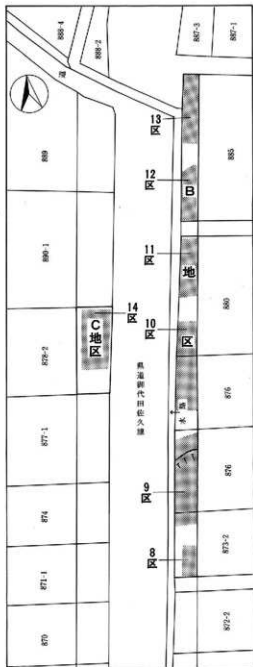
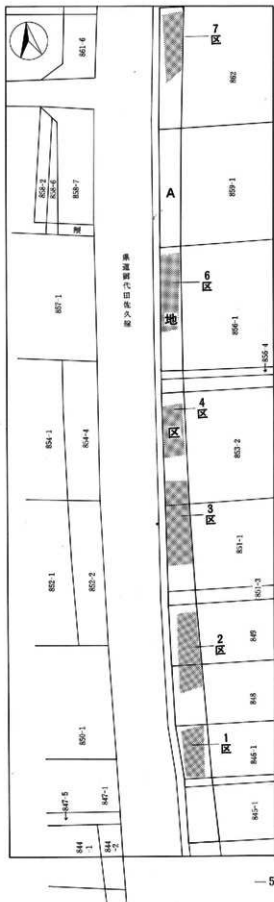
当地域の遺跡の全容を追求していく上でこの確認事項は今後重要な示唆を与えるものであるかもしれない。



第3図 新町遺跡の出土遺物



第4図 新町遺跡の発掘区 (1:2,500 佐久市基本図9による)



0 (1:500) 20m

内トレンチ設定箇所

第5図 新町遺跡第3次調査  
トレンチ設定図



1. 新町遺跡発掘区近景 (南西より)



2. 新町遺跡発掘区近景 (北西より)



3. 第1区トレンチ (南方より)



4. 第2区トレンチ (北方より)



5. 第3区トレンチ (北方より)



6. 第3区作業スナップ



7. 第4区トレンチ (北方より)



8. 第5区トレンチ (北方より)



1. 第7区トレンチ (北方より)



2. 第7区作業スナップ



3. 第8区トレンチ (南方より)



4. 第9区トレンチ (南方より)



5. 第10区トレンチ (南方より)



6. 第11・12区トレンチ (南方より)



7. 第13区トレンチ (北方より)



8. 第14区トレンチ (北方より)

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市岩村田遺跡群

新 町 遺 跡 Ⅲ

1988年2月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所

---

栗毛坂遺跡群

NAKA

中

SO

曾

NE

根

長野県佐久市岩村田中曾根遺跡発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

## 例 言

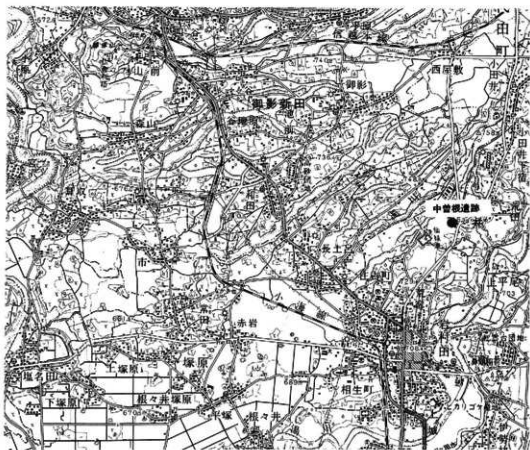
- 1 本書は昭和62年度株式会社堀内組によるパチンコ店敷地造成他事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 株式会社 堀内組
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査所在地籍及び面積 栗毛坂遺跡群中曾根遺跡（INS）  
佐久市大字岩村田字中曾根10-7・17、11-1・6 480㎡
- 5 調査期間  
昭和62年9月1日～9月8日、9月9日～10月28日
- 6 調査団の構成  
事務局  
佐久埋蔵文化財調査センター  
所 長 西沢 正巳  
庶務係主査 畠山 俊彦  
庶 務 係 田中 芳美（臨時職員）  
調査団  
団 長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）  
調査指導者 林 幸彦（佐久市教育委員会）  
羽毛田 卓也（佐久市教育委員会）  
調査担当者 高村 博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任）  
調 査 員 篠原 浩江（佐久考古学会員）  
調査補助員 神部 妙子  
発掘協力者 小林 幸子、宮川 百合子  
整理協力者 平林 美津江、宮川 百合子
- 7 本書の編集・執筆は、第3章遺跡の位置と環境を白倉盛男・高村が行い他はすべて高村が行った。
- 8 本書及び中曾根遺跡すべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。



## 1 発掘調査に至る動機

栗毛坂遺跡群中曽根遺跡は、佐久市岩村田に所在し、田切り地形に挟まれた台地状地形に立地する。本年度、長野県埋蔵文化財センターが中曽根遺跡の西方に近接して栗毛坂遺跡群C地区において発掘調査を実施しており、平安時代の竪穴住居址25棟、掘立柱建物址20数棟、その他溝状遺構、井戸址などが検出されている。また、東方においても、佐久市教育委員会が直営で昭和60年度に行った、前藤部遺跡においても平安時代の住居址が確認されている。

今回、株式会社堀内組によりパチンコ店敷地造成他事業に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久市教育委員会が株式会社堀内組より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 中曽根遺跡の位置(1:50,000 国土地理院地形図による)

## 2 調査日誌

9月1日(火)

重機による表土削平を行う。田の耕作土の下にさらに20cm位の耕作土が存在し、その下より漆黒色土が検出され、長野県埋蔵文化財センターの臼田氏からの教示によれば、田切りの低い部分ではないかとのことである。

9月2日(水)

重機による表土削平を続行し、ほぼ発掘区内を漆黒色土の上まで削土し終わる。

さらに発掘区内に約5mの間隔をおいて、ローム層まで掘り下げるトレンチを入れ遺構が存在するかどうか確認する。

9月3日(木)

発掘区内にローム層まで掘り下げるトレンチを入れたが、遺構は皆無と判断する。

駐車場予定地内に西部からトレンチを入れたが、田切りの低地部分にあたると思われ、水がどンドン湧きだしてくる。

9月4日(金)

標高の移動を行い、744、828mに設定する。発掘区の全体図を実測し、東側の壁面をきれいにする。

9月5日(土)

基本土層の実測を行い、駐車場予定地内に入れた試掘トレンチの実測を行う。

9月7日(月)

発掘区・試掘トレンチ・遠景の写真撮影を行い、すべての作業を終了する。

9月8日(火)

駐車場に入れた試掘トレンチが危険なため重機による埋め戻しを行う。

9月9日(水)～10月28日(水)

室内において報告書作成作業を行い、すべての作業を完了する。

## 3 遺跡の位置と環境

中曽根遺跡が存在するのは佐久市北部である。佐久市北部は、浅間火山南東斜面標高1,200m付近の千ヶ滝から発源する湯川が南流して、岩村田鼻頭稻荷神社付近で流れを變え西流し、地形的に1つの区画を形成している。この佐久市北部を含む浅間山南山麓地帯の地質は、浅間火山の第

一次外輪山である黒斑火山（最盛期には標高3,000m近い大火山）が、その火口壁に近い蛇掘川源泉付近で水蒸気爆発の際に火熱泥流（塚原岩屑流）を南方約15km離れた佐久市塚原付近まで達しており、総數百を越す大流れ山地帯を形成し、その分布は東側に湯川の線、西側は近津付近、南縁はほぼ千曲川に致る不等辺三角形の地域に及んでいる。また、第二次外輪山前掛火山の長期による噴火噴出物火山灰・砂礫は浮石を多量に含み浮石流（追分第一軽石流〈P1〉）となって数次にわたって南斜面を厚く覆い、東は湯川左岸の一部と右岸全面、西は小諸市栃木川左岸懐古園地点まで分布し、小諸市、御



第2図 周辺遺跡分布図（1：25,000）

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	位分No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
					縄	弥	古	奈	平	
1	10	栗毛坂遺跡群	小野井字塚原前掛部 岩村田字栗毛坂	台地		○	○	○	○	
1-1		中曾根遺跡	岩村田字中曾根	〃						本調査
2	16	龍崎澤第一重塚	岩村田字龍崎澤	〃						近世
3	11	跡原遺跡群	小田井字殿月他	〃	○	○	○	○	○	
4	12	中金井遺跡群	小田井字西園地	段丘	○	○	○	○	○	
5	4	曾根城遺跡	小田井字曾根城	台地	○	○	○	○	○	
6	7	岡崎部遺跡群	長土呂字岡崎部	〃	○	○	○	○	○	
7	8	芝間遺跡群	長土呂字北上中原他	〃	○	○	○	○	○	昭和58年度発掘調査
8	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂南し他	〃	○	○	○	○	○	
9	541	曾根新城跡	岩村田字下穴虫	〃					○	
10	45	新橋遺跡	岩村田字新橋	低地	○	○	○	○	○	
11	41	北肥原遺跡群	岩村田字北肥原	台地	○	○	○	○	○	
12	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田	〃	○	○	○	○	○	
13	43	西赤塚遺跡	岩村田字西赤塚	〃	○	○	○	○	○	
14	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後他	〃	○	○	○	○	○	
15	44	上岩子遺跡	岩村田字上岩子他	低地					○	
16	53	廣石遺跡	上平尾字廣石・中川原他	台地	○	○	○	○	○	
17	46	原巻遺跡	下平尾字原巻・高内	段丘	○	○	○	○	○	
18	47	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保他	台地	○	○	○	○	○	

代田町の大部分と佐久市の北半の地表面を覆っている。その北方、標高の高い部分には、第二次前掛火山による追分火砕流が厚く重っている。

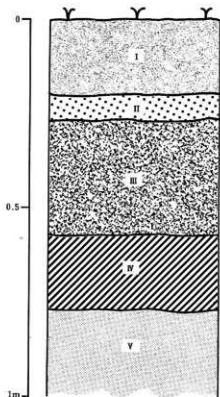
中曽根遺跡が存在する地域は、浅間火山による浮石流が厚く覆った地帯に属し、この新しい火山灰・砂礫は未分解凝結不十分な地層で、水抵抗力が極めて弱く、この地帯一帯には火山山麓特有な流水の浸蝕による大小の「田切り」谷地形の発達が目覚しく、浅間山頂を中心に山麓地形に応じて放射状に養筋も分布発達している。

この「田切り」地形に挟まれた台地上に遺跡が存在し、第2図で示したように、北から曾根城遺跡(5)、周防燧遺跡群(6)、芝宮遺跡群(7)、長土呂遺跡群(8)、枇杷坂遺跡群(11)など、佐久市において弥生時代～平安時代における大遺跡群が存在する。栗毛坂遺跡群内において、最近の発掘調査によって遺跡の概要がだいぶ明らかになってきている。昭和58年度佐久市教育委員会が実施した柳田遺跡からは、縄文時代早期の土坑が検出されており、また、昭和60年度佐久埋蔵文化財調査センターが実施した芝宮遺跡からは、古墳時代後期の住居址1棟、平安時代前葉の住居址3棟、平安時代の特殊遺構1基、中世の堅穴状遺構1基等が検出されている。昭和60年度佐久市教育委員会が実施した前藤部遺跡試掘調査からは、奈良～平安時代と思われる住居址が22棟(試掘調査のため住居址としたものの中には堅穴状遺構や溝も含まれている可能性はある)ほか、土坑20基、溝17基等が検出されている。さらに、昭和61～62年度にかけて、長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所が実施した関越自動車道上越線建設用地内の大規模な(78,500㎡)発掘調査により、栗毛坂遺跡A地区より縄文時代土坑15基、古墳時代堅穴住居址11棟、掘立柱建物址1棟が、B-b地区より古墳時代住居址4棟、平安時代住居址9棟、掘立柱建物址10棟、土坑30基が、B-c地区より古墳時代住居址2棟、古墳～奈良時代と思われる竪穴2ヶ所、平安時代住居址29棟、掘立柱建物址36棟、中世の住居址及び井戸址4他が、B-d地区より奈良時代住居址8棟、掘立柱建物址10棟、土坑38基他、平安時代住居址1棟、中世掘立柱建物址9棟他が、C地区より平安時代の住居址35棟、掘立柱建物址41棟他が検出されており、時代別総数は、縄文時代の土坑15基、古墳時代の住居址17棟、掘立柱建物址1棟、奈良時代の住居址8棟、掘立柱建物址10棟、土坑38基、平安時代の住居址74棟、掘立柱建物址87棟、土坑30基、中世の住居址4棟、掘立柱建物址12棟等<sup>1)</sup>が検出されている。以上のことから、前藤部遺跡及び栗毛坂遺跡C地区に近接した中曽根遺跡は、奈良から平安時代の遺構の存在が十分予想される。

註1 【長野県埋蔵文化財センター年報3・4】(S62・63) ⑧長野県埋蔵文化財センター

### 3 基本層序

中曽根遺跡は田切り地形に挟まれた台地状地形に立地する。遺跡の標高は744m付近ではほぼ平坦



第3図 中曽根遺跡基本層序模式図

面に位置している。中曽根遺跡の全体基本層序は下記の5層に分けられる。

第I層 10YR6/1 褐灰色土層 耕作土

第II層 10YR3/6 暗赤色土層 褐灰色土が混じる田の床土

第III層 10YR4/4 褐色土層 きめ細かく粘性があり、ぼそぼそしている。

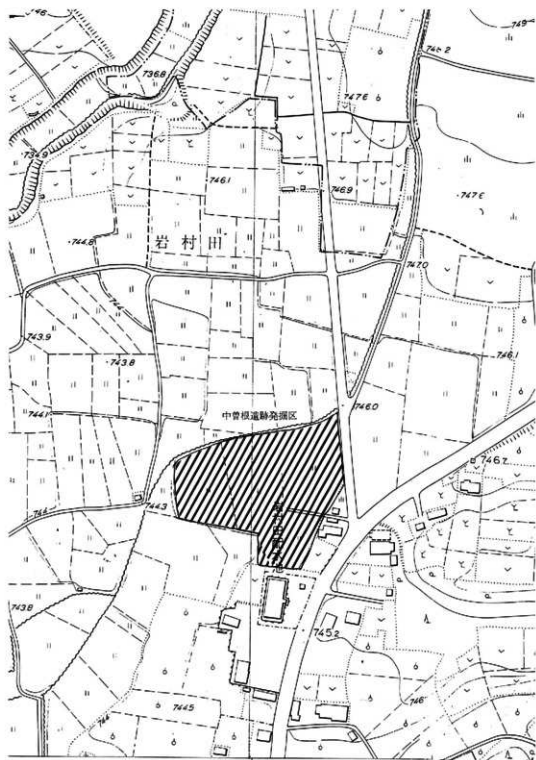
第IV層 10YR2/1 黒色土層 きめ細かく粘性あり、小礫・パミスを含む。

第V層 黄褐色土層 火山灰層でパミスを多量に含む。

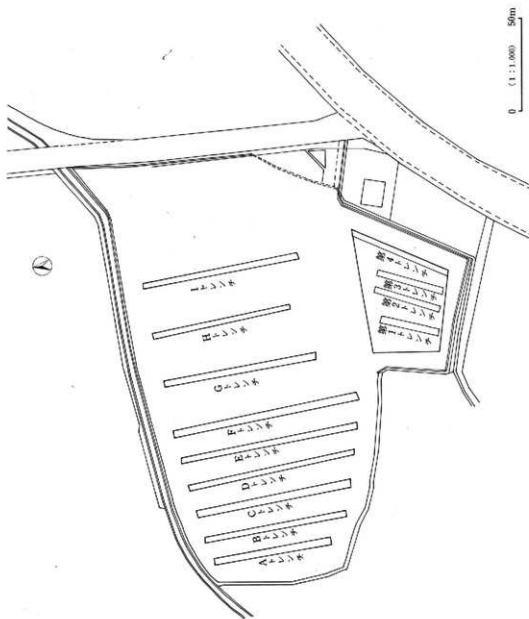
第I層と第II層は、現代の水田によりできた土層で、第III層も攪乱層であるが水田ができる前の畑などにより形成された層と思われる。第IV層は田切りの低い部分に見られ、かなり古い土層らしい。以上のことから発掘区内は、田切りの低い部分の地形と推測する。

#### 4 調査のまとめ

中曽根遺跡からは、発掘調査に至る動機で述べたように、近接する遺跡から平安時代の住居址が検出されていたため、同様に平安時代の遺構の存在が十分に想されたわけであるが、発掘調査を実施した結果、長野県埋蔵文化財センターが行っている栗毛坂C地区2区で検出された田切りの続きが当遺跡まで伸びていると考えられ、田切りの低湿地に当たったと思われる。栗毛坂遺跡C地区においては、田切りと田切りに挟まれた微高地に遺構がほとんど集中している傾向が見られ、田切りの低湿地に当たった中曽根遺跡からは、遺構は検出されなかった。また、遺物の出土も皆無であった。



第4図 中曾根遺跡の地形及び発掘区設定図(1:2,500 佐久市基本図No4による)



第5図 中曾根遺跡全体図



1. 中曾根遺跡遺景（北方より）



2. 桑畑区全景（北方より）





1. 発掘区全景 (南方より)



2. 試掘トレンチ全景 (南方より)

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市  
栗毛坂遺跡群 中 曾 根 遺 跡

1987年10月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター  
発行者 長野県佐久市教育委員会  
印刷所 株式会社佐久印刷所

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第10集

FUJI ZUKA  
藤 塚 遺 跡

長野県佐久市塚原藤塚遺跡試掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

## 例 言

1 本書は昭和62年度新町工場用地進入路新設工事に伴う、埋蔵文化財試掘調査報告書である。

2 調査委託者 浅科村

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 試掘調査所在地籍及び面積

藤塚遺跡 佐久市大字塚原字藤塚1548—1・3・4、1549、1569—2・3、1570—1・3、1572—1、  
(TFZ) 1573—1、1574、1575—1、1576—1、1577—1・2、1579—1、  
1599—1 50 (2,902) m<sup>2</sup>

5 調査期間

昭和62年9月11日～9月14日・9月16日～10月28日

6 調査団の構成

### 事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳  
庶務係主査 畠山 俊彦  
庶 務 係 田中 芳美 (臨時職員)

### 調査団

団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)  
調査指導者 林 幸彦 (佐久市教育委員会)  
羽毛田 卓也 (佐久市教育委員会)  
調査担当者 高村 博文 (佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任)  
調 査 員 篠原 浩江 (佐久考古学会員)  
調査補助員 神部 妙子  
発掘協力者 小林 幸子  
整理協力者 平林 美津江、宮川 百合子

7 本書の編集・執筆は高村が行った。

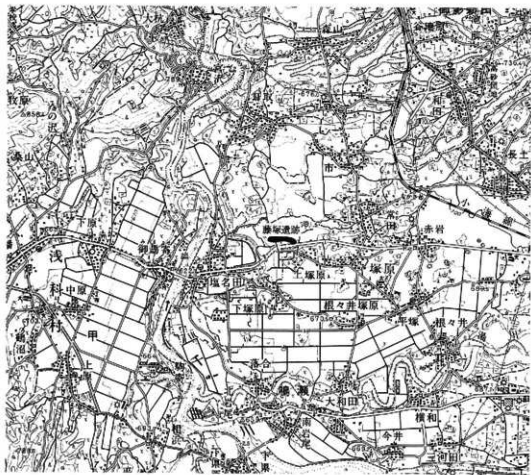
8 本書及び藤塚遺跡のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 1 調査に至る動機

藤塚遺跡は、佐久市塚原に所在し、標高670mを測る台地上に位置する。

藤塚遺跡内には、藤塚古墳群が存在し6基の古墳が確認されており、さらに昭和57年度佐久市教育委員会によって実施された詳細分布調査の際に、弥生時代～平安時代の土器片が表採されている。そのため、藤塚遺跡からは、古墳群と関連して何らかの遺構の存在が十分予想されるところである。

今回、浅科村により昭和62年度新町工場用地進入路新設工事が本遺跡内において計画されたため、佐久市教育委員会が浅科村より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施する運びとなった。



第1図 藤塚遺跡の位置(1:50,000 国土地理院地形図による)

## 2 試掘調査日誌

9月11日（金）

本日より、重機により道路敷地内の中心付近に幅1.5mのトレンチを掘り始める。本日で重機によるトレンチ掘りは終了する。

9月12日（土）

器材の搬入、テントの設営を行う。標高点の移動を行い、669.1mに設置する。重機により入れたトレンチの全体図を実測しはじめる。

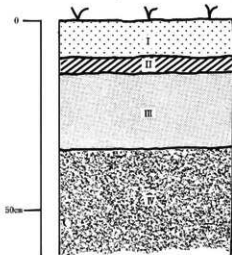
9月14日（月）

トレンチの全体図実測、レベルングを行い終了する。写真撮影を行い、基本土層のセクション図を実測し、すべての作業を終了する。器材・テントを撤収する。

9月16日（水）～10月28日（水）

室内にて報告書作成作業を行い、すべての作業を完了する。

## 3 基本層序



第2図 藤塚遺跡基本層序模式図

藤塚遺跡が存在する台地の地質は、家地頭第1号古墳発掘調査報告書に執筆された塚原付近の地形・地質から抜粋すると「この地域は、基盤である洪積層、湯川層の上部に、黒斑山（浅間山の第1外輪山）のカルデラ爆発によって噴出した、多量の火山砂・熔岩片や既存の岩片が一時に流下した、塚原岩屑流（泥流ともいう）が覆っており、その末端部にあたっている。厚さ3～5m、東側は湯川の線、西側は近津付近、南縁は、ほぼ千曲川に及ぶ不等辺三角形の地域に分布し、北上部は小海線で、その後の新しい浅間火山の噴出物追分火山灰流に覆われている」（白倉 1976）となっており、基本層序第IV層が火山灰層である。

以下、H区の基本層序を示す。

第I層	10YR6/1	褐灰色土層	粘性なく、小礫を含む。耕作土
第II層	2.5YR5/8	明赤褐色土層	粒子粗く、粘性なく、小礫を含む。田の床土
第III層	10YR3/1	黒褐色土層	粒子粗く、ばさばさしている。粘性なく、小礫を多量に含む。
第IV層	10YR7/3	にぶい黄橙色土層	粘性ややあり、礫を含む。

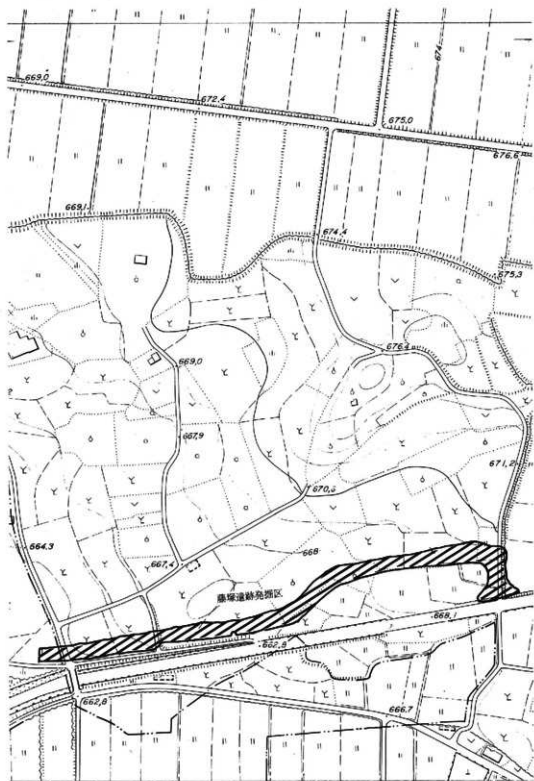
#### 4 調査の成果

今回、試掘を実施した藤塚遺跡は、新設道路内の幅約7m前後の調査のため、遺跡の全容を把握することはできない。遺跡の立地する塚原地帯には、大小100余個以上にも及ぶ半球状・島状の残丘があり、この地方では俗に『塚』と呼んでいる。

これらの塚は、古墳に利用されたものもあり塚原古墳群として、古くから知られていた。現在は、佐久市詳細分布調査により、藤塚古墳群（6基）、姫小石古墳群（2基）、家地頭古墳群（5基）、大豆塚古墳群（3基）、下大豆塚古墳群（2基）、東池下古墳群（4基）、鶯林古墳群（5基）の計27基の古墳が存在し、佐久市内でも有数の群集墳を形成している。

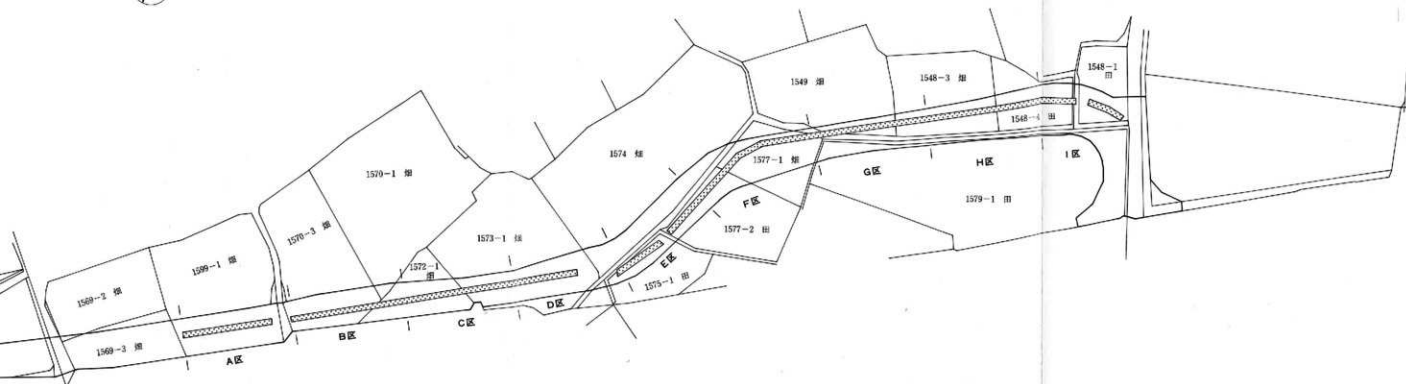
このため、今回の試掘調査において、当初、古墳群と関連した遺構の存在を予想していたわけであるが、遺構の落ち込みと思われるものはなく、攪乱がほとんどであった。また、遺物も土師器小片が1片と近・現代と思われる陶磁器が数片のみで、ほとんど採集されなかったといってもよい。

今回の試掘によって、この道路幅内には遺構が存在しないものと判断する。



第3図 藤塚遺跡の地形及び免掘区設定図(1:2,500 佐久市基本図No7による)





0 (1:1,000) 100m

第4図 藤塚通研試掘トレンヂ設定図



1. 高塚遺跡遠景（南方より）



2. A・B区全景（東方より）



1. B・C・D区全景（東方より）



2. E・F区全景（南方より）



1. G・H区全景（東方より）



2. I区全景（西方より）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第10集

宮の上遺跡群

MIYA

NO

UE

宮

の

上

長野県佐久市横和宮の上遺跡発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

## 例 言

- 1 本書は長野県佐久建設事務所による昭和62年度国補交通安全事業（歩道設置工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 長野県佐久建設事務所
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査所在地籍および面積 宮の上遺跡群宮の上遺跡（略号YMM）  
佐久市大字横和434-1、440-1、450-1・4、444-1、455-3、456-4  
459-3、460-4 150㎡
- 5 調査期間  
昭和62年10月15日～10月24日、昭和62年10月26日～昭和63年2月29日
- 6 調査団の構成  
事務局 佐久埋蔵文化財センター  
所 長 西沢 正巳  
庶務係主査 畠山 俊彦  
庶 務 係 田中 芳美（臨時職員）  
調査団  
団 長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）  
調査指導者 林 幸彦（佐久市教育委員会）  
羽毛田卓也（佐久市教育委員会）  
調査担当者 小山 岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）  
調査 主任 羽毛田伸博（佐久考古学会員）  
高村博文、三石宗一（佐久埋蔵文化財センター調査主任、調査係）  
調査補助員 神部妙子  
発掘協力者 和久井義雄、小林幸子  
整理協力者 平林美津江、宮川百合子  
地形・地質・石質指導 白倉 盛男（佐久考古学会副会長）  
灰釉陶器鑑定 齊藤 孝正（名古屋大学助手）
- 7 本書の編集は小山が行い、執筆は第Ⅱ章第1節を白倉盛男が担当し、他の章については小山が行った。また、遺構写真は小山、遺物写真は畠山が撮影した。

- 8 本書および宮の上遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査に際して地元の方々には数々のご協力・ご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

臼田武正、島田恵子、堤 隆、花岡 弘、原 明芳、福島邦男、由井茂也（敬称略五十音順）

## 凡 例

- 1 遺構の略称 竪穴住居址⇒H、溝状遺構⇒M、土坑⇒D
- 2 水糸レベルについては各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。
- 3 挿 図
  - 1) 重複遺構については、上端のみを実線で示表示した。
  - 2) 縮 尺 竪穴住居址⇒1/80、溝状遺構⇒1/100、土坑⇒1/60、土器⇒ $\frac{1}{4}$ 、鉄器⇒ $\frac{1}{2}$   
写真図版中の土器の縮尺についても上記に準拠する。
  - 3) 遺構・遺物実測図に用いたスクリーンパターンは下記の内容の表現である。

### 遺構実測図

地山 

カマド 

焼土 

### 遺物実測図

須恵器断面 

土器器内面黒色 

暗文 

# 目 次

例 言

凡 例

## 第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機..... 1

第 2 節 調査日誌..... 1

## 第 II 章 遺跡の立地と環境

第 1 節 自然環境（地形と地質）..... 2

第 2 節 遺跡の歴史的環境..... 3

## 第 III 章 基本層序

第 1 節 基本層序..... 5

## 第 IV 章 遺構と遺物

第 1 節 検出遺構・遺物の概要..... 5

第 2 節 竪穴住居址..... 6

1) 第 1 号住居址..... 6    2) 第 2 号住居址..... 12

第 3 節 溝状遺構および土坑..... 15

1) 第 1 号溝状遺構..... 15    2) 第 2 号溝状遺構..... 15

3) 第 1 号土坑..... 16

第 V 章 調査のまとめ..... 16

引用参考文献



## 挿 図 目 次

第1図	宮の上遺跡の位置及び周辺遺跡分布図	3
第2図	基本層序模式図	5
第3図	宮の上遺跡遺構全体図	6
第4図	宮の上遺跡発掘区設定図	7
第5図	第1号住居址実測図	9
第6図	第1号住居址カマド実測図	9
第7図	第1号住居址出土土器実測図	10
第8図	第1号住居址出土鉄器実測図	11
第9図	第2号住居址実測図	12
第10図	第2号住居址カマド関連部分敷細図	13
第11図	第2号住居址出土土器実測図	15
第12図	第2号溝状遺構実測図	16
第13図	第1号土坑実測図	16

## 写真図版目次

図版 一	1 宮の上遺跡遠景	2 第2号住居址遺物出土状況
	2 宮の上遺跡B地区全景	3 第1号溝状遺構
図版 二	1 宮の上遺跡B地区全景	4 第2号溝状遺構
	2 第1号住居址	5 第1号土坑
	3 第1号住居址	6 スナップ
	4 第1号住居址遺物出土状況	図版 五
	5 第1号住居址遺物出土状況	1 第2号住居址出土遺物
図版 三	1 第1号住居址カマド	2 第1号住居址出土遺物
	2 第2号住居址	3・4 第2号住居址出土遺物
図版 四	1 第2号住居址カマド関連部分	5 墨書土器
		6 第1号住居址出土鉄器

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

宮の上遺跡群宮の上遺跡は佐久市横和に所在し、千曲川支流の湯川左岸の第 2 段丘上に立地する。北側の対岸には弥生時代の太集落また古墳群で名高い北西の久保遺跡、同じ台地上の南側には佐久地方最大の横穴式石室を有する三河田大塚古墳を眺み、佐久市の遺跡の宝庫の中央部に立地していると言っても過言でない。

遺跡群は市内遺跡詳細分布調査によれば縄文・弥生・奈良・平安時代の遺物が採集されており、昭和50年度に行われた本調査地区の南東部にあたる高根遺跡の調査でも弥生時代の遺物が検出されている。

昭和62年度佐久建設事務所によって国補交通安全事業（歩道設置工事）が本遺跡内において計画されたため、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となった。そこで長野県教育委員会文化課・佐久建設事務所、佐久市教育委員会の三者で協議を行った結果、遺跡の破壊やむなきに至り緊急に調査して記録保存する必要性が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久建設事務所より委託をうけ、佐久市教育委員会から委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行う運びとなった。

## 第 2 節 調査日誌

昭和62年10月15・16日（木・金）、重機によって調査地区の西側A地区より表土除去、確認面の把握作業を開始し、溝状遺構一基を確認する。続いてB地区に入り、落ち込み2箇所を確認する。  
10月19日（月）～10月20日（火） A地区1号溝の掘り下げ・実測、B地区精査・1号住・2号住・1号土坑の掘り下げ・実測・写真撮影を行う。2号住は調査除外地に入るため、再協議となる。  
10月21日（水） A・B地区の埋め戻しを行う。2号住は再協議により延長調査をすることになる。  
10月22日（木） 重機によって延長部の表土除去、2号住・2号溝の掘り下げ・実測を行う。  
10月24日（土） 延長部埋め戻しを重機にて行い、全調査を終了する。  
10月27日（火）～昭和63年2月29日（月） 報告書作成作業を行い全調査を完了する。

## 第II章 遺跡の立地と環境

### 第1節 自然環境（地形と地質）

宮の上遺跡は佐久平の中心部佐久市大字横和宮の上にある。

佐久平は千曲川の上流沿岸平地で標高700m付近を中心として、北は小諸市、南は南佐久郡佐久町を長軸として南北約18km、東西は佐久市中心部で幅約10kmの長菱形をしている。この長菱形の長い対角線上を千曲川が北に向かって流れており、短い対角線は佐久市地域にあり幅としては最も広い部分にあたっている。東側は佐久山地の荒船山(1422m)を主峯とし兜岩山、物見山、八風山等が南北に連なり群馬県との分水嶺県界を作っており妙義荒船佐久高原国定公園となっている。西側は八ヶ岳蓼科山の2500m以上のフォッサマグナ内に噴出した富士火山帯の高峰が南北にならび諏訪地方との境界をなして、これも八ヶ岳中信高原国定公園となっている。佐久平は古来から交通の要地にあたり、わが国の東西交通路である東山道・中仙道・中山道、日本列島縦貫道路としての北国街道・善光寺街道・佐久甲州街道等の通過地であった。従って周辺山地には多くの峠路が開かれていた。東の碓氷峠・香坂峠・内山峠・田口峠・余地峠・十石峠、西の麦草峠・大石峠・大河原峠・雨境峠・大門峠などがその代表である。

佐久平と総称しているが、地質学的成因については南北二区分に別れている。境界線は志賀川が滑津川下流と合流して千曲川に注ぐ東西線を境として滑津川河床で標高650m、北岸段丘上で680m、比高30mの断崖が続いている。これは旧南北佐久郡境でもあり、南部を野沢平、北部を岩村田台地と明らかな相違を見せている。昭和36年この郡界を越えて東村・浅間町・中込町・野沢町の一村三町が合併して佐久市として誕生したわけで、佐久市が佐久平の中心部を占めている。

南部野沢平は主として千曲川の氾乱原沖積地と内山川の谷口扇状地で全体的には河床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、用水も古くから拓かれて安定し土地肥沃なために水稲多収地帯である。

北部は中込原から岩村田中佐都地区で浅間火山の山麓末端の台地状平地で基盤には浅間火山第一次外輪山黒斑山の大噴火による塚原泥流が中佐都附近で流れ山を百余形成しており、その上部へは第二次外輪山前掛山の長期の活動に基く追分第一軽石流(P<sub>1</sub>)が厚く被っている。この層は厚い部分は20～30mの層厚を示し軽石と火山砂火山灰で構成されており新期火山噴出堆積層のために風化も進まず凝結力も弱いために雨水による浸蝕がはげしく、流水による浸蝕谷“田切り地

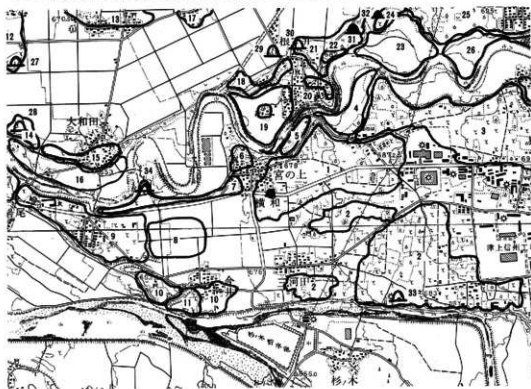
形”が見事に発達し、御代田から岩村田地区まで、西部は小諸懐古園附近まで深い垂直の谷を形成している。この田切り地形の谷底は常時地下水が湧出しており、弥生時代から最初に稲作が行われたであろうと考えられている部分でもある。このP<sub>1</sub>層の地表面には凸凹もあり湯川を堰き止めた湿地にその後の火山灰砂、流入堅石礫が堆積したものが所謂新期の“湯川層”として上面を覆っている。これらの地層が佐久平北半の堆積層序となっており、特に中込原附近では地下水層は極端に低く生活用水が得られなかったために佐久市が誕生して市役所が新築され、佐久水道が新設されるまでは人家もなく桑畑、野菜畑のみであった。

宮の上遺跡は中込原段丘上の湯川左岸の遺跡で発掘によって黒褐色表土層（全体層序第Ⅰ層）45~50cm、ローム層（第Ⅱ層）20cmそれより下部は湯川層湿地堆積層（第Ⅲ層）で1.1mまでは確認されたが下底面は未確認である。

（白倉 盛男）

## 第2節 歴史的環境

宮の上遺跡群は湯川と清津川にはさまれた東西に細長い広大な台地上にあり、南北450m、東



第1図 宮ノ上遺跡の位置及び周辺遺跡分布図（1：25,000国土地理院地形図による）

西1250mの規模を有する大遺跡群である。本遺跡群内における発掘調査は、昭和50年度に高根遺跡(1)で行なわれているが、狭小な調査面積であったためか遺構は検出されなかった。このため、佐久市遺跡詳細分布調査で縄文～平安時代の遺物が採集されているものの、本遺跡群の実像は極めて不鮮明である。このことは近接する寺畑(3)、寄塚(7)、白山(9)遺跡群も同様であり、湯川右岸の当地域における様相を知る手掛りは今井西原遺跡(8)において検出された古墳時代前期～後期、平安時代の住居計7棟等のみである。従って、本調査において検出される遺構の時期・性格について予想することは極めて困難であった。

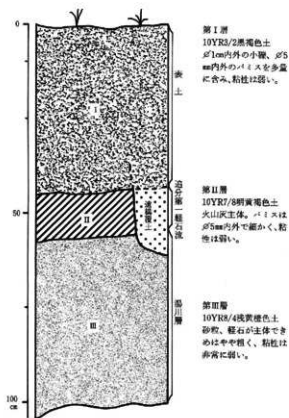
一方、対峙する湯川右岸地域はここ20年来、盛んに発掘調査が行われ、弥生～平安時代の集落址、墓址の一大密集地であることがわかってきた。第1図に示されている北西の久保(24)、一本柳(25)遺跡もその代表例である。本遺跡を含めた左岸地域が右岸地域の繁栄した様相と比べてどのような関係、相違を示すのか、今後の調査の進展に多大な期待が寄せられるところである。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	区分No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
					縄	古	中	古	中	
1	240	宮の上遺跡群	横河字宮の上・一本松・南民の口・西井番塚・原の上・高根・柳原・笠倉・原敷・十三郎池	弥生前2段丘	○	○	○	○	○	昭和50年度一発掘調査 高根遺跡本調査 宮の上遺跡
2	241	中家遺跡群	今井字大塚・新田前池 横和字下土堂池	清澤川2段丘	○	○	○	○	○	昭和62年度一発掘調査
3	107	寺畑遺跡群	横和字野の久・大塚・西原・中津池	2段丘	○	○	○	○	○	
4	106	野田分遺跡群	横和字野田池・大塚・西原・中津池	2段丘	○	○	○	○	○	
5	242	赤石河原遺跡	横和字赤石河原・芝野池	1段丘	○	○	○	○	○	
6	233	北久保遺跡	横和字北久保	1段丘	○	○	○	○	○	
7	231	寄塚遺跡群	横和字寄塚・鶴池	2段丘	○	○	○	○	○	
8	234	今井西原遺跡	今井字九反田池	2段丘	○	○	○	○	○	昭和69年度一発掘調査
9	230	白山遺跡群	横和字白山池・三河田字下原	2段丘	○	○	○	○	○	
10	235	今井宮の池遺跡	今井字宮の池・西池	2段丘	○	○	○	○	○	
11	236	今井原遺跡	今井字原・新田	2段丘	○	○	○	○	○	
12	84	沼原遺跡	横和字沼原	台地	○	○	○	○	○	
13	87	沼原遺跡	横和字沼原・交野・伊勢原池	台地	○	○	○	○	○	
14	225	北原見遺跡群	横和字北原見・南原見	2段丘	○	○	○	○	○	
15	226	大和五反原遺跡群	横和字大和・ついで	2段丘	○	○	○	○	○	
16	227	大和半遺跡群	横和字大和池・川原池	1段丘	○	○	○	○	○	
17	88	原原原敷池遺跡	横和字原原敷池・原敷	台地	○	○	○	○	○	
18	93	日向原遺跡	横和字日向原敷	2段丘	○	○	○	○	○	
19	94	横和字原原敷遺跡	横和字原原敷	1段丘	○	○	○	○	○	
20	97	伊勢原遺跡	横和字伊勢原	2段丘	○	○	○	○	○	
21	96	沼原遺跡群	横和字沼原・東原上池	1段丘	○	○	○	○	○	
22	108	横和字東原上池遺跡	横和字東原上池	1段丘	○	○	○	○	○	
23	99	中西の久保遺跡群	横和字中西の久保・東西の久保池	1段丘	○	○	○	○	○	
24	98	北西の久保遺跡	横和字北西の久保	2段丘	○	○	○	○	○	昭和44-45-54-57-60年度発掘調査により台地上を復原
25	105	一本柳遺跡群	横和字東一本柳・下橋寺・東大門北一本柳・東一本柳・西一本柳池	2段丘	○	○	○	○	○	昭和43・47年度一発掘調査
26	100	中毛遺跡群	横和字中毛	1段丘	○	○	○	○	○	
27	90	沼原遺跡	横和字沼原141-1	台地	○	○	○	○	○	
28	238	沼原遺跡	横和字北原見5223	2段丘	○	○	○	○	○	
29	109	横和字大塚遺跡	横和字大塚1179-1	2段丘	○	○	○	○	○	
30	110	沼原遺跡	横和字沼原141	2段丘	○	○	○	○	○	
31	111	上毛所古墳群	横和字上毛所888-1, 913-1, 922-1	2段丘	○	○	○	○	○	1-3号まで確認
32	116	北西の久保古墳群	横和字北西の久保	2段丘	○	○	○	○	○	17基(1.5C東-6C, 1.5基12C)
33	244	三河田大塚古墳	三河田字大塚14-5	2段丘	○	○	○	○	○	
34	239	寄塚古墳	横和字寄塚592	2段丘	○	○	○	○	○	
35	95	沼原遺跡	横和字沼原敷	1段丘	○	○	○	○	○	

## 第III章 基本層序

### 第1節 基本層序



第2図 基本層序模式図

宮の上遺跡は湯川左岸の2段目の段丘上に立地し、標高は676~678mをほかり、今回調査地区は東から西へ向って緩い傾斜を示す。

遺跡の基本的な層序は第2図に示したとおりで、表土第I層は45cm内外と比較的に厚い堆積を示す。第II層・火山灰層は10cm強の薄い堆積で、以下は“湯川層”と言われる砂粒主体層が厚く堆積しているが、この層厚については未確認である。

遺構の確認は第II層上において確実にでき得るが、第I層と遺構覆土は酷似しており、確認面のレベルがさらに高くなる可能性は強い。

本遺跡南東に約1.2km離れた位置の梨の木遺跡の遺構覆土も表土と酷似しており、このようなあり方は当地上の遺跡に共通することかもしれない。

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 検出遺構・遺物の概要

今回の調査区は遺跡群の西側中央の全長170m、幅2mの範囲である(第4図)。生活道路確保、ガス・水道管の保全のため、実質調査区は限定され、西側をA地区、東側をB地区として調査を行った(第4図)。A・B地区以外は立ち合い調査を実施した。これらの調査区から検出された遺構・遺物の概要は下記の通りである。

### 遺構

#### A地区

溝状遺構 1条 中世以降

#### B地区

竪穴住居址 2棟 平安時代

溝状遺構 1条 時期不明

土坑 1基 時期不明

### 遺物

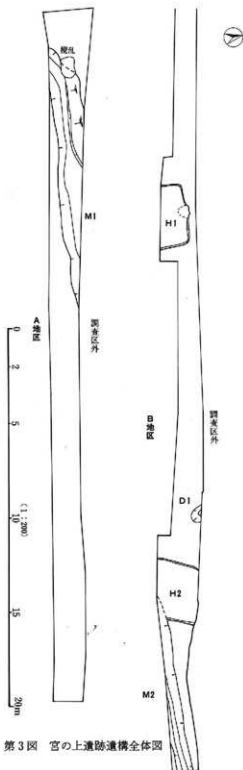
土器	平安時代	土師器	甕・坏 高台付坏 須恵器
			甕・坏
			灰粘陶器長頸壺・碗
	中世	内耳土器	土鍋
鉄器	平安時代	刀子	

## 第2節 竪穴住居址

### 1) 第1号住居址



遺構(第5・6図、図版二・三)

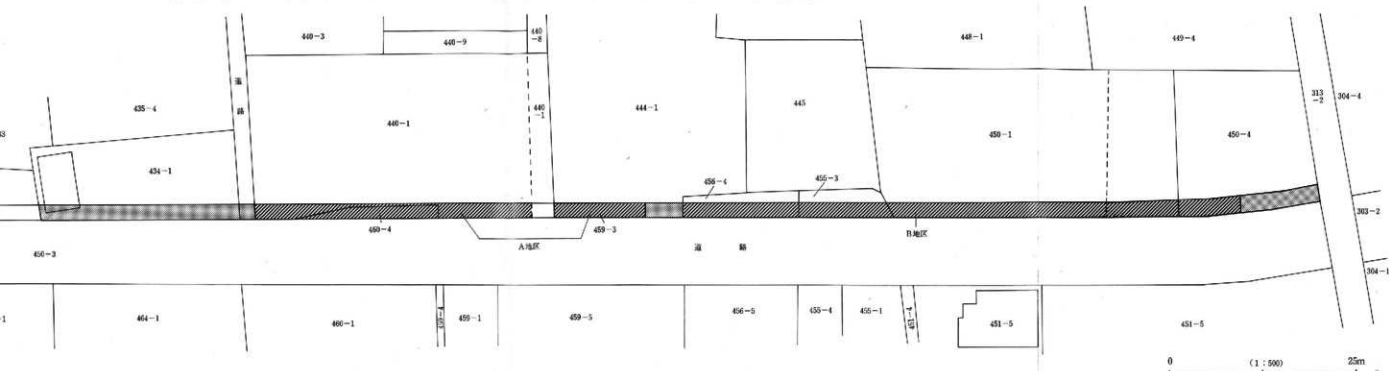
本住居址はB地区の中央西寄りから検出さ



第3図 宮の上遺跡遺構全体図



 発掘調査箇所  
 立ち合い調査箇所



第4図 宮の上遺跡発掘区設定図



れた。他遺構との重複関係はもたないが、南半分が調査区外にあるため、未調査である。

プランは東西長314cmが計測できる以外は不明であるが、該期の住居址としてはやや小型の方形を呈していたものと推測される。長軸方位についても不明であるがおおむね南北方向に近いとみて大過ない。

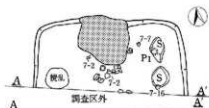
覆土は四層からなる。1～3層は主体土がほぼ同様で耕作土に近い。4層は床面上に10cm内外の厚さで一様に堆積し、炭化物を含む。

確認面からの壁高は16.5～29.5cmをはかり、床面からの立ち上がりは急である。壁体は地山第II層をそのまま利用したと考えられ、堅固に構築されている。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第II層上に褐色土を極く薄く敷いて叩きしめた「叩き床」がほぼ全面に認められる。おおむね平坦に構築されているが、堅固な状況とは言い難く、やや軟弱である。

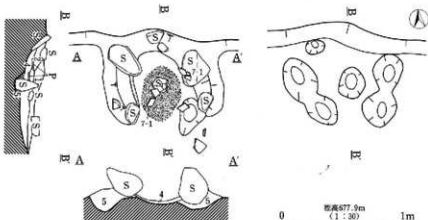
ピットは北東コーナー部から1個検出されたのみで、柱穴であるかは判断しかねる。13×15cmの円形を呈し、7cmの深度を有する。

カマドは北壁ほぼ中央部に構築され、天井部を除きほぼ良好な遺存状態である。規模は焚口～煙



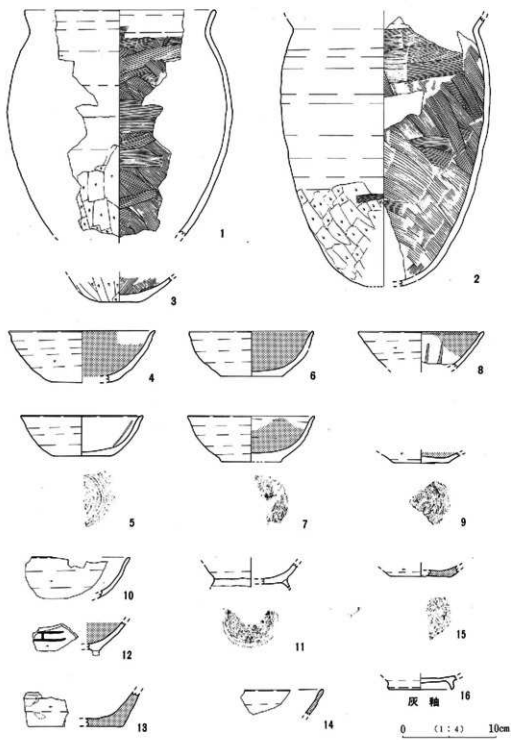
1. 10YR3/2 黒褐色土、 $\phi$ 10cm内外の小塊、 $\phi$ 5cm内外のベイス全層に含み、暗褐色土
1. 10YR3/3 暗褐色土層 褐色土を基調にローム粒、ベイス粒、種子ややねい
2. 10YR2/2 褐色土層 暗褐色土を基調にローム粒、ベイス粒、種子ややね、ややねあり
3. 10YR3/4 暗褐色土層 1層に比し、壁の別汚濁
4. 10YR2/2 暗褐色土層 黒褐色土を基調に少量のローム粒子、炭化物、炭化物粒、種子ややね、暗褐色あり

第5図 第1号住居址実測図



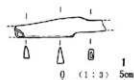
1. 7.5YR3/4 暗褐色土 暗褐色土を基調に黄土と7.5YR4/1暗褐色土(粘土)含む、天井部崩落によるもの、やや粘柱性、種子ややねい
2. 7.5YR6/2 灰褐色土層 暗褐色土と7.5YR4/1暗褐色土(粘土)混、種子ややねい
3. 7.5YR2/1 黒色土層 黒褐色土を基調、炭化粒、炭化物含む
4. 7.5YR3/2 黒褐色土層 灰褐色土を基調に、灰、黄土、炭化粒を含む、種子ややねい
5. 10YR3/4 暗褐色土層 暗褐色土に少量のローム粒混、種子粗く、ばさばさとしている。カマド構築時の補填土及び樹土

第6図 第1号住居址カマド実測図



第7图 第1号住居址出土土器实测图

道部までの長さ85cm、袖部95cmを測る。煙道部は北壁中央を緩らかな山形に僅かに掘り込み、偏平な溶結凝灰岩を当て補強する。袖部は東西両脇の床面に2個一対のビットを掘り、その上にローム粒混じりの暗褐色土（第5層）を馬蹄状に築いて形造られる。構築に際して袖の芯には大型の溶結凝灰岩・軽石を東西両側に各2個ずつ納め補強している。天井部は崩壊・流出が著しく形状を留めないが、1・2層中の褐色粘土土を基調に築かれたようで、安山岩などが補強材に用いられたようである。火床部は両袖内の床面上に44×31cmの範囲で認められる。真赤に焼け込んだ状態で、中央やや北寄りに



第8図 第1号住居址  
出土鉄器実測図

には小ビットを掘り込み、五角錐状に面取された軽石を直立させ支脚石を設けている。カマド底面には土器片を多量に含んだ炭化物・灰（第3・4層）が10cm内外堆積している。

遺物の出土状態 遺物はカマド内、その周辺に集中分布し、灰胎碗のみ住居西壁寄りの覆土上層部に分布する。いずれも破損品で散逸した状況を示すものが多い。

第2表 第1号住居址出土土器観察表

層位	遺物	位置	成形および器形の特徴	調査	備考
7-1	土器器 器	(20.0) (24.0)	口縁部「く」の字に深く、広く外反し、胴部はふくらみ球形を呈する。	内)ロー胴部+フタココナダ、以下斜位のハケム脚外)ロー胴部+中位は+フタココナダ、以下ヘタナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 7.5Y7/4(黄褐色) 磁気測定値 A No.8・12、フタナ
7-2	土器器 器	— (28.5)	胴部は浅碗形を呈する。	内)ロー胴部+フタココナダ、胴部上位部に横斜位のハケム脚、胴下位部にハケム脚、外)ロー胴部+中位は+フタココナダ、下位ヘタナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 7.5Y6/8(褐色) 磁気測定値 B No.5・6、カマド
7-4	土器器 杯	(15.6) (5.5) (7.0)	口縁部内寄気味に開き、胴部で広く外反する。底部は厚くやや丸みを帯びる。	内)口縁部傾位、腰部傾位の丁寧なヘラミガキ、大部分、黒色処理されるが口縁部の一帯赤色を呈する箇所あり、外)フタココナダ、底部手摺ヘタナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 5YR7/6(褐色) 磁気測定値 B No.7、フタナ
7-5	土器器 器	(12.8) 4.4 (6.6)	口縁一帯部内寄気味に開き、胴部で僅かに外反する。	内)+フタココナダ、2本一組の十文字状指文外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 5YR7/6(褐色) 磁気測定値 C No.7、フタナ
7-6	土器器 杯	(13.0) 4.9 (6.4)	口縁一帯部内寄気味に開き、胴部で外反する。	内)物文風の放射状ヘラミガキ、全面に黒色処理されるが、所々に赤色の付着物あり、外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 10YR3/3(暗褐色) 磁気測定値 C No.7、フタナ
7-7	土器器 杯	(13.5) 4.9 (6.4)	口縁一帯部内寄気味に開き、胴部で外反する。	内)+フタココナダ、粗いヘラミガキ、黒色処理される、外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 2.5YR5/8(明赤褐色) 磁気測定値 No.2、5、7、フタナ
7-8	土器器 杯	(12.2) (3.9)	口縁一帯部直線的に開く。	内)+フタココナダ、部分的に黒色処理されるが胴部、外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 5YR7/6(褐色) 磁気測定値 C No.7、フタナ
7-9	土器器 杯	— (1.1) (6.4)	口縁一帯部直線的に開く。	内)+フタココナダ、黒色処理外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 2.5YR/6(褐色) 磁気測定値 B フタナ
7-10	土器器 杯	(4.4)	口縁一帯部内寄気味に開き、胴部で僅かに外反する。	内)黒色処理され、粗いヘラミガキが施される、外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 5YR7/6(褐色) 磁気測定値 C No.7、フタナ
7-11	土器器 高台付 杯	— (2.8)	口縁一帯部直線的に開く。	内)+フタココナダののちヘラミガキ外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 10YR5/6(赤色) 磁気測定値 B フタナ
7-12	土器器 高台付 杯	— (2.3)	口縁一帯部直線的に開く。	内)+フタココナダ、黒色処理ののち研磨外)+フタココナダ	粘土 密、焼成 良好 磁気測定値 B フタナ 体部に判読不明の墨書
7-13	土器器 器	(3.7)	口縁一帯部直線的に開く。	内)+フタココナダ、斜位のナダ外)傾斜した	色調 7.5Y5/2(灰青灰色) 磁気測定値 B フタナ
7-14	土器器 器	(2.7)	口縁一帯部直線的に開く。	内)外周ともに+フタココナダ	色調 2.5Y5/3(黄褐色) 磁気測定値 C No.7、フタナ
7-15	土器器 杯	(4.1) (5.4)	口縁一帯部直線的に開く。	内)外周ともに+フタココナダ	色調 2.5Y5/3(黄褐色) 磁気測定値 B フタナ
7-16	土器器 器	(1.6) (1.9)	口縁一帯部直線的に開く。	内)外周ともに+フタココナダ	色調 7.5Y7/1(灰白色) 完全天磨 No.1



覆土は大略で二層からなる。1・1'・2層は基本層序第I層と主体土が酷似する。北側の中央部に堆積する3～6層は、炭化物、焼土、ローム、粘質土などで構成され、カマドに関連する層序と考えられる。

確認面からの壁高は7～16cmをはかるが、西壁北側は遺構検出時に削平されてしまっている。壁体は黄褐色ローム層(第II層)をそのまま利用したと考えられ、床面からの立ち上がりは緩い。構築状態はやや軟弱である。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色ローム層(第II層)を平坦に掘り窪めた後、褐色土を極く薄く全面に埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね平坦に構築されており、ほぼ全面にわたって堅固である。ピットは検出されなかった。

カマドは北壁中央にあると考えられる。北側の中央部には先述したようにカマドに関連すると考えられる土の堆積があり、構材と考えられる焼石が散乱し、数個の浅いピット、火床とも考えられる焼土の広がり認められた。

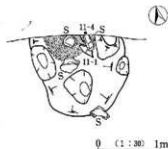
遺物の出土状態 遺物はカマド内、カマド前方部の床面上、及びその直上に集中分布する。土器器種11-1のように住居内各所に広く散在するものもあり、多くは破損したのちに投棄された遺物とみられる。

#### 遺物(第11図、図版5)

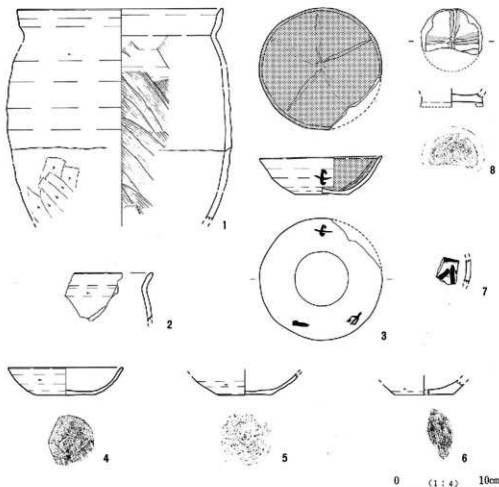
土器・須恵器・灰釉陶器があり、土器の占める割合が圧倒的に高く、須恵器、灰釉陶器は極く僅かでしかも細片のみである。図化できたのは土器6点のみである。

土器の器種には甕・坏・高台付坏がある。甕11-1は口縁部が肥厚し、受口状に直立し、胴部は砲弾形を呈する。口縁-胴部中位までロクロ調整、下位はヘラケズリが施される。その他、図化できなかった破片もこれとほぼ同じ器形のものばかりである。11-2は口縁部が「く」の字状に短く屈曲する小型品と考えられ、ロクロ調整が施されている。坏11-3～6はいずれもロクロコナデが施され、底部は3～5が手持ちヘラケズリ、6が回転糸切りのまま未調整である。また、3は黒色処理されるが他はされない。墨書は3・7にみられ、3は記号状の墨書が3箇所に7は判読不明な文字がみられる。高台付坏11-8は内面に黒色処理が施される。須恵器の器種には坏、灰釉陶器の器種には長頸壺と考えられるものがあるが、いずれも細片で図化はできない。このため、灰釉の年代・生産地についても不明確である。

細片であるが、第1号住居址と接合関係をもつ資料があるため、本址の所産は1号住に近いと思われる。



第10図 第2号住居址  
カマド関連部分敷細図



第11図 第2号住居址出土土器実測図

第3表 第2号住居址出土土器観察表

発掘層	器種	数量	成形および器形の特徴	調査	備考
11-1	土師器 壺	(21.8) (32.5)	口縁部は肥厚して受口状に直立し、胴部はよく丸み熟栗形となる	内)口縁部はコクヨコナダ、以下は横斜位のヘタ・胴部 外)口縁部上はコクヨコナダ、以下は縦位のヘタ・胴部	粘土 密、焼成 良好 色調 5Y R7/4 (赤み・緑色) 田代製陶 A No.1・2・7・8・9・11・12・13、フタ土
11-2	土師器 鉢	(5.1)	口縁部広く外反する。	内外面ともにコクヨコナダ	粘土 粗い、焼成 良好 破片定数目 フタ土
11-3	土師器 杯	13.0 4.0 5.6	口縁へ体部内寄気味に開き、胴部で僅かに外反する。 底面は糸切りののち手持ちヘラケズリ。	内)全面黒色起層。口縁部部のスヘラヒガキ、放射状線文あり。 外)コクヨコナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 10Y R8/4 (黄緑色) 完全発露 底面 3箇所に見出しあり
11-4	土師器 杯	(12.2) 2.9 6.0	口縁へ体部内寄気味に開き、胴部はやや肥厚する。底面は糸切りののち手持ちヘラケズリ全面に施す。	内外面ともにコクヨコナダ	粘土 密で硬質、焼成 良好 色調 10Y R7/6 (緑色) 田代製陶 B、No.29
11-5	土師器 杯	(3.3) 5.6	底部回転糸切り	内外面ともにコクヨコナダ	粘土 密、焼成 良好、色調 10Y R5/4 (赤み・黄褐色) 田代製陶 B No.1、フタ土
11-6	土師器 杯	(1.1) (5.2)	底面 手持ちヘラケズリ	内)ヘタヒガキ 外)コクヨコナダ	粘土 密、焼成 良好 色調 10R6/8 (赤褐色) 田代製陶 B フタ土
11-7	土師器 杯	—	—	内)黒色起層、ヘタヒガキ 外)コクヨコナダ	破片定数目 フタ土 到底不明蓋あり
11-8	土師器 高台付 杯	(0.9)	取付高台、底部回転糸切り	内)黒色起層。ヒガキなし、十字状の織文あり 外)コクヨコナダ	田代製陶 A フタ土

### 第3節 溝状遺構

#### および 土坑

##### 1) 第1号溝状遺構

遺構 (第3図、図版四)

本遺構はA地区の西側から検出された。ほぼ東西方向に横走する溝である。

検出長11.2m、幅1.7m内外、深さ13~57cmをはかり、西から東へ向ってレベルを低下させる傾向にある。断面形は緩い逆台形を呈し、底面は割合平坦である。

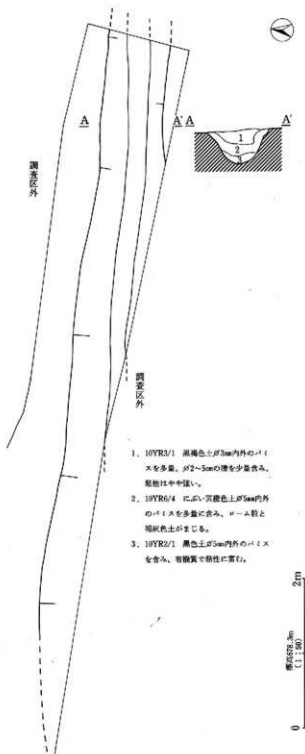
覆土は下層に砂の堆積がみられることから水流のあったことも予想される。尚、現在当調査区は地表下1m近くまで掘り進めると湧水が著しいことも付記しておく。

遺物 平安時代の所産と考えられる土師器杯(内黒)が1片、中・近世の所産と考えられる内耳土器が6片出土したが、いずれも細片のため図化するには至らない。また、これらの遺物が本溝の年代を直接あらわすものとも考え難い。本溝の所産は漠然と中・近世以降としておく。

##### 2) 第2号溝状遺構

遺構 (第12図、図版四)

本遺構はA地区の東端より検出され



第12図 第2号溝状遺構実測図

た。ほぼ東西に直線的に横走する溝であるが調査されたのはごく一部で東・西それぞれに更に長く伸びていると思われる。検出長9m50cm、幅80cmを計測し、37~46cmの深度を有する。断面形はU字形を呈し、側壁の角度はかなり鋭角的である。覆土は三層からなり、1・3層は黒色土基調、2層はローム粒子が基調となる。

**遺物** 平安時代と考えられる土師器片1片、須恵器坏2片の他、現代の植木鉢の破片が出土した。いずれも細片のため図化するには至らない。構築時期は不明である。

### 3) 第1号土坑

**遺構** (第13図、図版四)

B地区の東側より検出され、第1号住居址に近接する。北半分以上は調査区外にある。

東西長117cm以上の楕円形を呈すると考えられ、深さは50cm以上と考えられる。覆土は四層からなり、1層は耕作土に近く、2・3層は黒色土基調、4層はローム粒が基調である。遺物は検出されず、時期判断できない。



第13図 第1号土坑実測図

## 第V章 調査のまとめ

今回は幅約2mという狭い範囲であったにもかかわらず、平安時代の竪穴住居址2棟、時期不明の溝状遺構2条、土坑1基が検出され、横和地区では初めて本格的な発掘調査が行われた。遺構・遺物の詳細については前章で詳述してあるので、特に遺物の位置付けを中心にまとめたい。

**遺構** 後述する出土遺物の特徴から竪穴住居址2棟は平安時代の近い時期に構築されたと考えられる。一辺310cm余の方形か長方形を呈すると考えられ、カマドは北壁中央に付設、主柱穴が明確でないなど共通項も多い。位置関係は住居間16m余と近接する。また、B地区は1・2号住居址が存在することから居住区と考えられるが、A地区は湧水が激しく、住居址分布も認められず、往時居住区であったとは考え難い。

**遺物** 比較的良好な平安時代の土器が2棟の住居址内から検出された。各住居址毎にその属性を探り、一応の位置付けを行いたい。

第1号住居址から出土した土器の種類は土師器、須恵器、灰陶陶器があり、土師器の占める割合が須恵器、灰陶陶器の占有率をはるかに凌駕する。土師器の器種には壺・坏・高台付坏があり、



甕は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、胴部は砲弾形を呈する。口～胴部中位までロクロ調整胴部下位にヘラケズリが施される北信に主たる分布を示す器形である。坏は口径15.6cmのやや大ぶりなものと口径13cm内外のものが4点ある。内面黒色処理されるものが多く、されないものは1点のみである。黒色処理はやや粗略で炭素吸着が十分でない部分も多く、研磨も粗雑で暗文状のものが多く、底部調整は回転糸切りが主である。高台付坏は形態の伺えるものはないが、内面黒色研磨されるものとされないものがある。須恵器は形態のわかるものがなく、先述したように量は極く僅かである。灰釉陶器は東濃系光ヶ丘1号窯式期に比定される皿がある。

以上、第1号住居址から出土した土器は食器において土師器の占有率が極めて優位であること、土師器に内面黒色処理される傾向が強いこと、黒色処理ののちの研磨が粗雑化し、暗文状のものが多くなること、光ヶ丘1号窯式期の東濃系の製品の流入が始まることなどの観点から、原明芳氏の食器類を中心とした平安時代時期区分によるところの第II段階の終り頃（9世紀末～10世紀初頭）に位置付けることが可能である。

第2号住居址から出土した土器の種類は土師器・須恵器・灰釉陶器があり、第1号住と同様土師器の占める割合が須恵器、灰釉陶器の占有率をはるかに凌駕する。土師器の器種には甕・坏・高台付坏があり甕は口縁部が肥厚して直立し、胴部は砲弾形を呈する。外面調整は第1号住居址の甕と同様で、北信に主たる分布を示す形態の一つである。坏は口径13.0cm、器高4.0cm、底径5.6cmの第1号住居址出土の土師器坏とはほぼ近い法量を示すものと、口径12.2cm、器高2.9cm、底径6.0cmの器高の低くなったものがある。内面黒色処理されるものは1点、されないものは3点で、黒色処理衰退化の傾向が顕著である。黒色処理されるものは暗文状の研磨が施されるのみで、第1号住居址よりも更に研磨の省略化が進行している。この傾向は高台付坏においても同様である。底部調整は手持ちヘラケズリされるものと、回転糸切未調整のものが共存する。須恵器・灰釉陶器は先述したように量が少なく、しかも細片であるため、説明できない。

以上、第2号住居址の出土土器は、食器の坏に黒色処理されないものが増加すること、黒色処理されても暗文状の研磨が施されるのみであることなど、内面黒色処理衰退化の傾向が第1号住居址よりも顕著である。従って、原氏の平安時代時期区分では第II段階よりも新しい部分に位置付けるのが妥当と言える。

最後に出土土器資料中に特徴的にみられたロクロ調整の甕について触れておこう。従来、佐久地方では奈良時代以降煮沸具としては「く」の字、「コ」の字状に屈曲する口縁部をもち、胴部全面にわたってヘラケズリされる所謂「武蔵型」甕の主たる分布地域で、ロクロ調整の甕の主たる分布地域である北信とは様相を異にしていることが認識されている。ところが、本遺跡第1号住居址出土資料のように光ヶ丘1号窯式期を基点とする東濃系の灰釉陶器が流入し始める時期になると所謂「武蔵型」甕が1点も存在しなくなる資料もみられるようになる。これと同様な傾向を

示す資料は佐久市三塚鶴田遺跡4号住居址などもあげられる。このような資料は今後増加することが予想され、東濃系灰釉陶器の流入と「武蔵型」甕の消滅→ロクロ調整甕の成立・発展への転換は密接な関係をもっていたと理解される。そしてこの現象は政治的支配体制、流通機構の変化などの歴史的背景を感じさせるのである。この問題については佐久地方の平安時代土器の流れをある程度的確に把握したのちに再考したい。また御代田町十二遺跡では東濃系灰釉陶器が流入する段階に入ってもロクロ調整甕は成立せず、所謂「武蔵型」甕が存続する傾向がみられるという。この遺跡差についても今後具体的な資料とつき合せて十分検討しなければならない。

#### 引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1978 【跡部町田】  
佐久市教育委員会 1980 【蛇塚B】  
佐久考古学会・佐久市教育委員会 1980 【周防畑遺跡】  
小諸市教育委員会 1981 【五ヶ城】  
小諸市教育委員会 1983 【曾根城遺跡】  
佐久市教育委員会 1984 【若宮遺跡】  
佐久市教育委員会 1985 【鉤師屋遺跡】  
小諸市教育委員会 1985 【宮ノ反】  
佐久埋蔵文化財調査センター 1986 【芝 間】  
西 弘海 1986 【土器様式の成立とその背景】  
佐久埋蔵文化財調査センター 1987 【淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I】  
佐久埋蔵文化財調査センター 1987 【高師町・西大久保】  
御代田町教育委員会 1987 【前田遺跡】  
原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食器具—変化とその背景の子察—」【信濃】第39  
巻4号  
長野市教育委員会 1987 【三輪遺跡(2)】  
長野市教育委員会 1987 【横田遺跡群富士宮遺跡】



1. 宮の上遺跡遺景（湯川村岸北西の久保遺跡より眺む）



2. 宮の上遺跡跡地区全景（東方より）



1. 宮の上遺跡B地区透景（北方より）



2. 第1号住居址（東方より）



3. 第1号住居址（南方より）



4. 第1号住居址遺物出土状況



5. 第1号住居址遺物出土状況



1. 第1号住居址カマド (南方より)



2. 第2号住居址 (南方より)



1. 第2号住居址カマド間床部分



2. 第2号住居址遺物出土状況



3. 第1号溝状遺構（西方より）



4. 第2号溝状遺構（東方より）



5. 第1号土坑（北方より）



6. スナップ



1. 第2号住居址出土遗物

11-1



7-16

2. 第1号住居址出土遗物



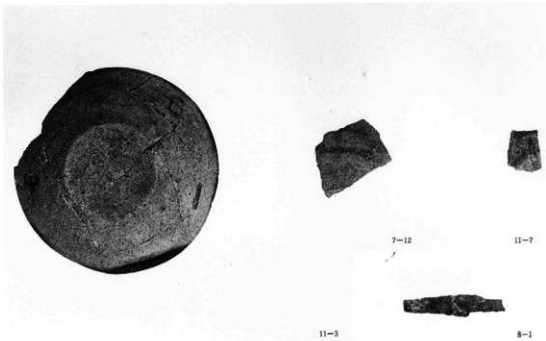
11-3

3. 第2号住居址出土遗物



11-4

4. 第2号住居址出土遗物



5. 墨岩土器 (1:2)

11-5

7-12

11-7

6. 第1号住居址出土铁器

8-1

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市宮の上遺跡群 宮の上遺跡

1988年2月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所

---



佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西森・竹田墓』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池部・西野墓』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝 塚』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新 町 Ⅱ』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『山上塚敷、下川原・光明寺』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『淡路・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅱ・曲尾Ⅰ』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高岡町・西大久保』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	『北西ノ久保』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	『梨 の 木』

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市

岩村田遺跡群 菅田遺跡Ⅲ・新町遺跡Ⅲ  
 宮の上遺跡群 宮の上遺跡 藤塚遺跡  
 栗毛坂遺跡群 中曾根遺跡

1988年2月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター  
 発行者 長野県佐久市教育委員会  
 印刷所 株式会社佐久印刷所

---